Fate/stay nightに介入した青年

地獄の傀儡師

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。

この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

Ｆａｔｅ／ｓｔａｙ　ｎｉｇｈｔに介入した青年

【Ｎコード】

Ｎ４７２９Ｎ

【作者名】

地獄の傀儡師

【あらすじ】

暗殺屋を営んでいた青年彩雅。

彼はひょんなことからＦａｔｅ／ｓｔａｙ　ｎｉｇｈｔの世界に行くことになる。

果たして彼の介入によりこれから何がおきるのか。

Ｆａｔｅの夢小説です。

かなりの駄文だと思いますが面白いと思った人は是非感想などくださいね

依頼と新たな力（前書き）

緊張しますが楽しんで読んでください

依頼と新たな力

彩雅「依頼が何もこないな」

青年の名は夜月彩雅(やげつさいが)彼は暗殺屋を営む者である

彩雅「最近は全く依頼がこないな」

そう言うと自身の刀を抜き刃を見た

彩雅「あぁこんなに暇だと腕がなまってしまうな」

刃を見ながら言っていると

？「では依頼を頼みたいんだが？」

不意に誰かの声が聞こえた

彩雅「誰だ？」

声が聞こえまわりを見たが誰もいない

彩雅「気のせいか？」

再び刃を見ようとしたら

？「ちょいとこっちに来てもらおうか」

そう聞こえた瞬間目の前が真っ白になっていた

彩雅「此所は？」

目が覚めるとそこは辺り一面真っ白な空間だった

彩雅「此所何処だ？」

辺りを見回すが何もない

？「やぁ」

声が聞こえ振り向くとそこには一人のおっさんが立っていた

彩雅「誰だアンタ？」

一応警戒しながら聞いておいた

？「まぁそう警戒するな。並行世界の管理者とでも言っておこうか」

彩雅「並行世界？あのいくつもあるもしもの世界みたいなやつか？」

管理者「あぁそうだ」

彩雅「ほう、でその管理者が俺に何のようだ？」

管理者「君に依頼があるんだよ」

彩雅「ほうどんな依頼だ」

その場に座り聞くことにした

管理者「私の管理するＦａｔｅ／ｓｔａｙ　ｎｉｇｈｔの世界に行ってもらいたいんだよ」

彩雅「Ｆａｔｅ／ｓｔａｙ　ｎｉｇｈｔ？」

確か聖杯を争ってサーヴァントが戦うというやつだったな

彩雅「何故俺が行かないといけない？」

管理者「君が行ったらあの世界はどうなるか知りたいから」

彩雅「要するにアンタの暇つぶしにつき合えということか？」

管理者「まぁそうなるかな」

暇つぶしと認めやがったなコイツ

彩雅「行ってやってもいいが条件がある」

管理者「何だね？」

彩雅「普通に戦ったら恐らくサーヴァントには勝てないだろ」

管理者「それはそうさ」

彩雅「だからいくつか他の世界の能力や力がほしいんだがいいか？」

管理者「いいだろう。好きなだけほしい能力や力をいうといい君が使えるようにしてあけよう」

いいのかよしかも好きなだけ使えるようにするって

彩雅「じゃあまず飛天御剣流と六式を使えるようにしてくれ」

管理者「それだけでいいのかい？」

彩雅「じゃあ片腕を闇魔刀とデビルトリガーが使えるデビルブリンガーにしてくれ」

管理者「まだ少ないんじゃないの？」

ち嘗めやがってならもうほしい力や能力をひたすら言ってやる

彩雅「両目は写輪眼で全ての写輪眼の技を使えるようにして、後うちはサスケの技を全て使用可能、後は頭で思い描いた武器などを全て瞬時に作れる創作という能力がほしい」

管理者「けっこう要求するねぇ」

彩雅「後は斬ったらその部分が完全回復し更にそこに巣食うものを消す刀をくれ」

もはや特殊能力じゃないがくれるだろうか

管理者「分かったでは君にその能力と力を与えよう」

流石管理者無茶苦茶な奴だな

管理者が手を上げその手から光が出て俺を包みこんだ

管理者「終わったよ。さぁ能力と力を確認するといい」

俺はとりあえず左腕を見ると見事にデビルブリンガーになっている

他にも本来持っていた刀の他にもう一本刀を持っていた

彩雅「スゲーな」

その後は創作を使い武器を作ってみることにした

なら約束された勝利の剣（エクスガリバー）を頭に思い描くと

彩雅「便利だな」

俺の右腕には約束された勝利の剣（エクスガリバー）が握られていた

管理者「もう確認はいいかい？」

彩雅「ちょっと待った」

俺は万華鏡写輪眼の天照を管理者に向けて放った

管理者「熱い熱いこら止めんかー！」

管理者はあっという間に黒炎に包まれた

よしこれでさっきの嘗めた口調のことは帳消しにしてやろう

管理者「全く管理者に天照を放つなど君は何を考えている！」

けっこう怒っているようだが身体には傷一つない。流石管理者チートだな

管理者「では確認はもういいな？」

彩雅「あぁもういい」

管理者「ではＦａｔｅ／ｓｔａｙ　ｎｉｇｈｔの世界に行ってもらうぞ」

彩雅「ちょっと待ったこの刀の名は？」

もらったもう一本の刀の見せながら聞いた

管理者「自分で名ぐらいつけろ」

何だそれ考えるのがめんどくさいだけだろう

管理者「あぁ後万華鏡写輪眼の反動はないしデビルトリガーやチャクラの量は無限にしてあるから」

何！コイツマジでＦａｔｅの世界で俺を最強にさせる気か？

管理者「後君がストーリーに介入することによって原作とは違うことになるかもしれないから」

彩雅「それぐらい承知している」

管理者「おっと後Ｆａｔｅ／ｓｔａｙ　ｎｉｇｈｔの情報を与えておくよ」

管理者がそう言った後俺の頭に情報が流れてきた

マジでこの人チートだなまぁ俺もそうだろうけど

管理者「では気をつけて」

管理者の言葉を聞いた後俺は意識がなくなった

チート的なキャラになった彩雅はＦａｔｅの世界で何をするのか？
次回に続く

依頼と新たな力（後書き）

読んでくれてありがとうございます。

この調子でこれからも頑張っていくつもりです

次回Ｆａｔｅの世界に入ります

では次回も楽しんで読んでください

介入彩雅（前書き）

彩雅は普通に強いですね

もうちょっと文才がほしいです

介入彩雅

彩雅「うっ」

俺は目を覚まし立ち上がった

彩雅「此所は学校か？」

辺りを見回すと学校のような校舎があった

彩雅「どうやらＦａｔｅの世界に来たようだな」

俺は無事に来れてよかったとほっとしていると

ガキィィィン！

彩雅「何だ？」

金属が凄い音でぶつかる音が聞こえたので俺はそこに向かった

彩雅「おいおいマジかよ」

俺は金属音がしたところに向かったら、そこには朱い槍を持った全身青い男と双剣を持った赤い外套を着ている男が目にもとまらぬ速さで戦っていた

彩雅「あれはサーヴァントのランサーとアーチャーだな」

俺はそう確信して戦闘を見ているが二人共かなり動きが速い

彩雅「能力と力もらっといてよかった」

もし何も無しにこの世界に来たら俺は瞬殺されていたと思うと冷や汗がでる

彩雅「何か取り込み中だから離脱しよう」

俺はその場を去ろうとしたら

カラン

ランサー「うん？」

落ちていた缶を蹴ってしまいランサーが俺の存在に気付いたようだ

彩雅「やば！」

俺は走ってその場を逃走した

彩雅「はぁ此所までくれば」

今学校の下駄箱に退避していた

ランサー「お前けっこう足速いな」

彩雅「ち！」

気付いたら後ろにランサーがいた

ランサー「悪いが見られたからには死んでもらう」

ランサーが槍を構え俺に突きを放った

彩雅「紙絵」

俺は六式の紙絵を使い突きを避ける

ランサー「ほう人間の割りにはいい動きをしているな」

ランサーが再び槍を構える

彩雅「俺はただの人間じゃない。お前等サーヴァントとも殺りあえる力を持つ者だ」

ランサー「はっ　言うじゃねぇか餓鬼、何処でサーヴァントのことを知ったか知らんがやってみろよ！」

ランサーが再び俺に向かって突撃してきた

彩雅「写輪眼」

俺は両目を写輪眼にしランサーの攻撃を全て見抜き避ける

ランサー「はっやるじゃねぇか」

彩雅「アンタもやるなだがその程度じゃないだろ」

ランサー「調子にのるなよ餓鬼！」

いきなり攻撃のスピードが上がった

彩雅「ようやく本気か」

だがその攻撃も俺は全て避ける

彩雅「どうしたこれが本気か？これじゃあ期待外れもいいところだな」

ランサー「嘗めやがってなら我が必殺の一撃を受けよ！」

ランサーからかなりの殺気が向けられると同時に槍に力が集中されていく

彩雅「あれはやばいな」

俺は写輪眼のある技を使い構える

ランサーｓｉｄｅ

ランサー（チィ）

何だよコイツさっきから俺の攻撃を全て避けやがる

この最速のサーヴァントと言われるこの俺がこんな人間に嘗められてたまるか

この必殺の一撃で全てを終わらせてやる

ランサーｓｉｄｅ　ｏｕｔ

彩雅「来いよランサー！」

ランサー「受けよ刺し穿つ死棘の槍！」（ゲイ・ボルク）

彩雅「なっ！」

ランサーの槍が俺の心臓を貫いた

ランサー「貴様の心臓貰いうけた」

彩雅「がは！」

俺は血を吐き倒れた

ランサー「ふん手間取らせやがって」

彩雅「それはすまなかったな」

ランサー「何！」

驚いてる驚いてる心臓を貫かれ死んでいるはずの俺が平然としていることに

ランサー「貴様何故ゲイボルグをくらって生きている！」

彩雅「さて何でだろうな」

だがさっきのは危なかった。もし俺が写輪眼のイザナギを使っていなかったら死んでいたかもしれない

ガタ

彩雅＆ａｍｐ；ランサー「うん？」

音がしたのでそっちを見ると

？「あっ」

青年は俺達と目が合うと逃げていった

ランサー「ち始末する奴が増えちまったな」

ランサーが俺に背中を向け青年を追い走り少ししてから

ランサー「貴様の心臓は俺が貰うそれまで死ぬなよ」

そう言ってランサーは行ってしまった

彩雅「思ってたよりずっと強かったな」

俺はその場に座りこんだ

彩雅「本当に能力と力もらってなかったら死んでたな」

俺は座りながら呟く

彩雅「あれそう言えば俺の家ってこっちにあるのか？」

疑問に思い呟くと

管理者「やぁいきなり一悶着あったようだね」

彩雅「うん管理者何処にいる？」

俺は管理者の声が聞こえたのでまわりを見たがまわりには誰もいない

管理者「私は今君の頭の中に話掛けているんだよ」

彩雅「そうか　で俺の家は何処にあるんだ」

管理者「少しは驚いてほしいな。まぁいい君の家は衛宮士郎の隣にあるよ」

彩雅「衛宮士郎ってあぁランサーが追って行った奴か」

俺は納得していると

管理者「家の場所は君の左腕が指す光を追っていけばつくよ」

管理者がそう言うと俺のデビルブリンガーから光が出てきた

管理者「その光の指す方向に行けばあるよ。後君はこの学校の生徒だからそれじゃ」

彩雅「ちょっと待て」

管理者からの応答が途絶えた

彩雅「はぁだるいが家を目指そう」

俺は光の指す方向に向かって行った

彩雅「まぁ普通の家だな」

家に着きとりあえず家を見てみたが二階建ての普通の家のようだ

彩雅「とりあえず飯でも買いに行こう」

家の中に入り何故か自分の部屋に置いてあった財布を取り外に出たら丁度ランサーが衛宮の家に入って行った

彩雅「主人公と進行でも深めておこう」

俺も衛宮邸に向かった

ついに介入した彩雅さてこれからどうなっていくのか？こうご期待！

介入彩雅（後書き）

ついにサーヴァントと戦闘を開始した彩雅

彼は人でありながら何を求めるのだろうか？

では次回も楽しんで読んでください

原作の重要人物との顔合わせ（前書き）

何か台本のようにどうしても書いてしまうのでそれでもいい人は引き続き楽しんで読んでください

原作の重要人物との顔合わせ

彩雅「ランサーと戦っているようだな」

俺は現在衛宮邸でランサーと戦っている衛宮士郎を見ている

彩雅「やはり戦闘は素人だな」

衛宮士郎はポスターのような物を棒にした状態で、ランサーの槍を弾き跳ばしたがすぐに蹴りをくらい吹っ飛ばされていた

彩雅「そろそろセイバーが来るころだな」

そう予想をしていたらセイバーが現れたようだ

彩雅「さてそろそろ介入する準備をしよう」

俺は両目を万華鏡写輪眼にして二人の戦闘を見る

彩雅「おっランサーがゲイ・ボルグの構えになったな、迂闊に宝具を使うとは」

若干呆れた後

彩雅「天照！」

俺はセイバーとランサーの間に天照を放ちその場に向かった

彩雅「ランサーこんなところで宝具と真名を知られていいのか？」

俺はそう言いながら二人の前に姿を現す

ランサー「あん？またてめぇか？」

ランサーは凄い不満そうな顔で俺を見る

彩雅「まぁそう殺気立たずに（ブン）って危ないな！」

セイバーが不可視の剣で俺を攻撃してきた

セイバー「貴方は何者ですか？」

セイバーが俺を睨んで見る

彩雅「ただの人間だよ」

ランサー「嘘つくな」

ランサーがツッコミをいれてきた

セイバー「先ほどの黒炎は貴方が放ったのですか？」

彩雅「そうだと言ったらどうする？」

セイバー「貴方はサーヴァントですか？」

彩雅「俺はサーヴァントではないよ」

セイバー「では何なのですか？」

彩雅「人間だよ君達と互角に戦える力を持った」

セイバー「何故そう思うのですか？」

彩雅「さぁ何でかな」

ランサー「取り込み中悪いが俺は去らしてもらうぜ」

ランサーはそう言うと塀を超えて何処に行ってしまった

セイバー「しまった貴方と話していて逃げられてしまった」

彩雅「まぁいいだろうアイツも様子見だったんだろうし」

確かこの時のランサーは言峰に全サーヴァントと戦い生き残れだかって命令されてた気がするし

衛宮「なぁ彩雅お前一体何者何だ？」

放置されていた衛宮が俺に質問してきた

彩雅「何でお前は俺の名前を知っている？」

衛宮「え！だって同じクラスじゃないか」

あぁそう言えば管理者が俺はあの学校の生徒とかって言ってたな

彩雅「そうだったな。すまない忘れていた」

衛宮「大丈夫か？頭でも打ったのか？」

彩雅「大丈夫だ」

何かスゲー心配そうな顔して衛宮が言ってきたので大丈夫と言っておいた

セイバー「シロウ塀の向こうにもう一人サーヴァントがいるようです」

衛宮「本当かセイバー？」

セイバー「はい私が塀の向こうへ行き様子を見てきます」

セイバーはそう言うと塀を跳び超えて行ってしまった

衛宮「あっセイバー！」

彩雅「しょうがないな」

俺も塀を跳び超えて　セイバーの後を追った

塀の向こうではセイバーとアーチャーが今にも戦闘しそうな感じで
睨みあっていた

彩雅「まぁ二人共そう殺気立たないで」

俺が間に入ると二人にギロっと睨まれた

凛「貴方夜月君よね？」

アーチャーのマスターの遠坂凛が俺に気付いたようだ

彩雅「あぁそうだよ凛」

凛「貴方がセイバーのマスターなの？」

彩雅「違う俺じゃなくて衛宮だよ」

凛「え！」

凛が驚いていると衛宮がようやく来たようだ

衛宮「遠坂！」

凛「衛宮君どうして貴方が」

その後は衛宮が衛宮邸に招いて話がしたいと言ったので俺達は全員衛宮邸に入った

衛宮「聖杯を奪い合う殺し合い」

凛「そうよ本来なら私達も敵なのよ」

凛が聖杯戦争の説明をし衛宮がそれを聞いていた状態であった

衛宮「いや俺は遠坂と戦う気はないから」

凛「はぁ？貴方自分の立場が分かっているの？」

衛宮「あぁ分かってるよ。でも俺は遠坂とは戦わないよ」

凛「はぁ本当に衛宮君て」

彩雅「甘い奴だな」

凛「えぇ全く」

アーチャー「紅茶が入ったが飲むかね？」

アーチャーが紅茶を持ってきた

凛「貰うわ」

セイバー「はい」

衛宮「あぁ」

彩雅「貰おう」

俺達は全員アーチャーのいれた紅茶を飲んだ

衛宮「美味いな」

セイバー「えぇとても美味です」

凛「何でサーヴァントなのにこんなに美味しいの？」

彩雅「美味い」

流石衛宮の未来の姿のだけのことはあるな

アーチャー「まぁ当然だよ」

アーチャーが当然のような顔をしている

凛「で夜月君が何で此所にいるの？」

彩雅「暇つぶし後俺のことは彩雅でいい」

凛「じゃあ彩雅君貴方は聖杯戦争とは無関係でしょ。あまり首を突っ込まないほうがいいわよ」

彩雅「あぁじゃあ俺は帰る」

衛宮「あぁ彩雅よかったら家で飯食っていかないか？お前一人暮らしだしさ」

彩雅「ちょっとこれから予定があってな。だがいいんなら明日から朝食と夕飯を食わしてくれ」

衛宮「あぁ分かったじゃあまた明日な」

凛「またね彩雅君」

セイバー「ではサイガまた」

アーチャー「まぁ気をつけて帰りたまえ」

彩雅「じゃあな」

俺は衛宮邸を後にした

彩雅「あぁさて何かやることがないかな」

現在何となく衛宮邸を出たのだか行く宛もなくさまよっている状態である

？「だからお前はな」

？「ごめんなさい」

彩雅「うん？」

目線の先で青年が女の子に怒鳴りつけていた

彩雅「あの子震えているな」

何となく走り出していた

？「この役立たず！」

青年が女の子を殴ろうと拳を振り上げた瞬間

ゲシィ

？「え！」

？「がは！」

彩雅「あぁ悪いちょっとつまずいてな」

俺は青年に跳び蹴りをみまい女の子の前に立った

？「誰だお前って夜月じゃないか」

彩雅「お前誰だっけ？」

俺を首を曲げて考えるワカメのような頭をしている奴はあぁ間桐慎二か、じゃあこの脅えている子は間桐桜か

彩雅「イヤー悪いな間桐」

慎二「お前何のつもりだ？」

彩雅「何のつもりだって君が女の子を殴ろうとしてたから、それを止めたんだよ」

慎二「桜は僕の妹だ！僕が何をしようが勝手だろ！」

桜が震えながら俺の後ろに隠れる

彩雅「妹だから何やってもいいだと？ふざけるな！」

俺は慎二の胸元を掴む

慎二「な！」

彩雅「お前はそうやって震えている女の子を殴って楽しいのかあぁ？」

慎二「五月蝿い僕に質問するな！」

彩雅「屑が」

慎二「屑だと？」

彩雅「あぁお前はどうしようもねぇ屑野郎だ！」

俺は慎二の胸元から手を離し桜の手を握った

彩雅「行くぞ桜」

桜「は！はい」

慎二「桜待て！」

慎二が何か言ったが俺はそれを無視し桜を連れて自宅に向かった

桜ｓｉｄｅ

またどじをしてしまい兄さんを怒らせてしまった

いくら謝ってもやはり許してくれない

またいつも通り殴られると思い目をつぶったら

ゲシィ

桜「え！」

慎二「がは！」

目をあけたら兄さんが誰かに蹴られていた

彩雅「あぁ悪いちょっとつまずいてな」

私の目の前に学校の先輩の夜月彩雅さんが立っていた

夜月先輩は兄さんに私のことで色々言ってくれたそして

彩雅「行くぞ桜」

夜月先輩が私の手を握った

桜「は！はい」

その後私は夜月先輩と手を繋いだ状態で歩き出した

先輩に手を握られたとき胸がドキッとしたこれって私・・・

桜ｓｉｄｅ　ｏｕｔ

彩雅「えっと何もないところだけど上がってくれ」

桜「はい　お邪魔します」

俺はとりあえず桜を自宅に招き入れた

彩雅「えっといつも大丈夫か桜？」

桜「あまり・・・・」

まぁ確かにあれが兄では大丈夫じゃないな

彩雅「よかったら暫く家に居る？」

桜「え！」

彩雅「桜がいいんなら暫く家に居ていいよ部屋も余ってるし」

桜「でも夜月先輩にご迷惑じゃ」

彩雅「俺は別にいいよそれと夜月先輩じゃなくて彩雅でいいよ」

桜「いえそんな一応先輩ですし」

彩雅「確かにそうだな」

桜「えっとじゃあ彩雅さんと呼んでいいですか？」

彩雅「あぁいいよ」

何か桜顔赤いけどどうかしたのかな？

桜「ご迷惑じゃないんなら居てもいいですか？」

彩雅「あぁ迷惑何かじゃないからいいよ」

桜「ありがとうございます」

何かノリで助けたら暫く一緒に暮らすことになったがまぁいいか

さてこれから彼の身に何がおきるのか？こうご期待！

原作の重要人物との顔合わせ（後書き）

次回はキャラ紹介の予定です

ではまた次回楽しんで読んでください

オリキャラ紹介（前書き）

オリキャラの紹介です

かなり彩雅はチートキャラですね

オリキャラ紹介

夜月彩雅（やげつさいが）

暗殺屋を営む青年

顔よし頭よし運動神経は通常の人間の倍はあり基本何でも出来るいわゆる万能野郎

だが恋愛には興味がなかった為にかなりの鈍感である

実年齢は２０歳だがＦａｔｅの世界では１７歳に下がっている

所持能力・力・武器

直死の魔眼

物の死が見えるようになる。最初から所持しているが現在は使っていない

写輪眼一式

相手の動きをコピーしたり見切ることができ、他にも万華鏡写輪眼になれば特殊な技が使える

創作

頭で思い描いた武器や盾などを瞬時に出現させることが出来る

六式

特殊体術六式（指銃・嵐脚・剃・鉄塊・月歩・紙絵・六王銃）やその派生技が全て使える

忍術

うちはサスケの忍術だけ全て使用可能

デビルブリンガー

悪魔の腕であり闇魔刀という日本刀に似た刀を出現させられる。デビルトリガーを使用することによって悪魔の力を得られる

飛天御剣流

神速の剣技飛天御剣流の全ての技が使用可能

斬鬼

彩雅が最初から所持している刀
切れ味が非常によく振りやすい彩雅の愛刀である

名のない刀

斬ったら全ての怪我などを痛みもなく治せ、体内に巣食う物を消すことが出来る。（聖杯などは体内から出すことは出来るが恐らく消せない）現在名を考えている

管理者

Ｆａｔｅ／ｓｔａｙ　ｎｉｇｈｔの世界を管理している謎の男

見た目は５０歳くらいのおじさん

彩雅をＦａｔｅの世界に行かせどう物語が進むのか見てみたいと言っているが、実際の目的は不明

かなり謎に包まれた人物である

オリキャラ紹介（後書き）

生身でサーヴァントと殺りあえる力を持つ人間でかなり凄いですよね

では次回も楽しんで読んでください

狂戦士VS彩雅（前書き）

やっと更新出来ました

では楽しんで読んでください

狂戦士VS彩雅

次の日暇つぶしに外に出たらちょうど衛宮達に会った

彩雅「よう衛宮に凛、サーヴァント連れて何処に行くんだ？」

恐らく協会だと思うが一応聞いておく

凛「聖杯戦争のマスターをエントリーする為に今から協会に行くのよ」

彩雅「俺も行っていいか？」

凛「どうして？」

彩雅「暇つぶし」

衛宮「暇つぶしに行く場所じゃないだろ」

彩雅「いいんだよ別に」

衛宮「いやよくないだろ」

凛「いいわよ別に」

衛宮「いいのかよ」

凛「衛宮君つべこべ言わないでとっとと行くわよ」

俺達は協会へ向かった

セイバー「シロウ私は此所で待っています」

衛宮「あぁ頼んだセイバー」

アーチャー「私も此所で待っているよ凛」

凛「分かった」

セイバーとアーチャーは入口に残り俺達は中に入った

？「私が聖杯戦争監督役の言峰綺礼だ」

言峰が自己紹介した

何が監督役だ卑怯者がその前にてめぇは本当は死んでるはずだろうが

凛「聖杯戦争のマスターのエントリーよ」

言峰「ほうなら君がセイバーのマスターかい？」

言峰が俺を見て言う

彩雅「違う」

凛「綺礼こっちがセイバーのマスターよ」

凛が衛宮を見て言う

言峰「そうかてっきり君だと思ったのだがな」

言峰が俺を見て言う。コイツの目は気にくわない。俺を見下している目俺の心を見ているような目

彩雅「何だよ？」

言峰「いや何でもない」

何処までも気にくわない野郎だな

彩雅「俺は戻るな」

衛宮「どうかしたのか？」

彩雅「いや別に」

言峰の顔を見てると気にくわないなどという理由など言えないな

凛「分かったじゃあアーチャー達と一緒に待ってて」

彩雅「分かった」

俺は入り口に向かって歩き出すと

言峰「青年よ君は本当に人間かい？」

言峰が俺に聞いてきた。本来ならお前に言うことなどないが

彩雅「あぁアンタとは違うただの人間だ」

俺はそう言い入り口に向かった

向かっている途中ライダースーツを着た金髪とすれ違った

？「人間よ待て」

彩雅「何だ？」

金髪に呼び止められたので止まる

？「貴様人間にしては過ぎた力を持っているな」

彩雅「お前も過ぎた力を持っているようだが」

？「ほう我にそうような口を聞くとはいい度胸だな人間、特別に名を聞いてやろう」

彩雅「イレギュラーとでも覚えておけ」

？「イレギュラーその名覚えておこう人間よ」

そう言うと金髪は行ってしまった

彩雅「ふんうざい英雄王だ」

いっそのこと此所でジャイアニズム野郎を排除すべきか？

だが奴の力は巨大だそれにセイバーもまだ約束された勝利の剣（エクスカリバー）を使えない、やはりもう少し待つしかないか

俺は入り口に向かった

セイバー「サイガ、シロウ達はどうしたのですか？」

彩雅「まだ中にいる」

アーチャー「不機嫌のようだがどうかしたのかね？」

彩雅「監督役が気にくわない奴でな顔を見てるだけでイライラする」

アーチャー「君がそこまで言うんなら相当何だろうな」

彩雅「お前の口調も聞いてるとイライラするがな」

アーチャー「おやそれはすまない」

彩雅「すまないと思ってないだろ」

アーチャー「そんなことはない」

セイバー「サイガ、貴方は聖杯戦争に参加するのですか？」

セイバーが不意に聞いてきた

彩雅「あぁ暇つぶしにな」

アーチャー「正気か？人間がサーヴァントに勝てると思っているのかね？」

彩雅「あぁ思っている」

セイバー「それは流石に無理なのでは？」

アーチャー「セイバーの言う通りだと私も思うが」

彩雅「まぁ次の戦闘で証明してやるよ」

アーチャー「なら楽しみにしておこう」

アーチャーが少し笑いながら言った。後でその顔を驚きに変えてやろう

暫くしたら衛宮達が戻ってきた

凛「これで私達は敵同士よ」

衛宮「だから俺は遠坂と戦う気はないって」

凛「衛宮君に無くても私にはあるのよ」

衛宮「それでも俺は戦わないよ」

彩雅「阿呆かお前は？」

衛宮「何がだよ？」

彩雅「もう戦いは始まってるんだぜ。戦う気が無いなんて甘ったるいこと言ってる場合じゃないだろ」

衛宮「それでも」

？「ねぇお話はまだ終わらないの？」

全員「誰だ？」

俺達は全員声をするほうを見るとそこには一人の少女とゴツい男がいた

？「はじめまして皆さん私の名前は」

彩雅「名はイリヤスフィール・フォン・アインツベルン、隣に居るのはサーヴァントのバーサーカー、真名はギリシャ神話の英雄ヘラクレス、宝具は「十二の試練（ゴッド・ハンド）」であっているかなお嬢さん？」

イリヤ「へーどうして分かったのお兄さん？」

彩雅「さぁどうしてかな」

凛「ヘラクレスがバーサーカー何て、それに彩雅君奴の宝具の力は何なの？」

彩雅「それは戦えば分かる」

イリヤ「今日はお兄ちゃん達を殺しに来たけど気が変わったは、そこのお兄さんに死んでもらおう」

イリヤが俺の顔を見て笑いながら言う

彩雅「いいだろうやってみろ」

衛宮「待てお前本気か？」

セイバー「シロウの言う通りです。貴方では勝ち目などありませんよ！」

凛「こんな所でいぬ死にするつもりなの？」

アーチャー「凛やセイバーの言う通りだ此所は私とセイバーに任せたまえ」

彩雅「心配いらんむしろ今のお前達では恐らく勝てないだろ」

イリヤ「ねぇもう死ぬ覚悟は出来たお兄さん？」

彩雅「あぁ死ぬ覚悟はまだ出来てないが来いよ」

イリヤ「やっちゃえバーサーカー」

バーサーカー「■■■■■！」

何を言っているかは分からんがバーサーカーが突っ込んできた

彩雅「速いな」

バーサーカー「■■■■■！」

バーサーカーが斧剣を振るってきた

彩雅「鉄塊　剛（ごう）」

俺は最高硬度の鉄塊を使い同時にデビルブリンガーを解放し斧剣に拳を振るった

ガキィィィン

彩雅「くぅ流石バーサーカーパワーが違うな」

何とか斬撃を受け止めたがけっこう身体に衝撃が来るな

バーサーカー「■■■■■！」

彩雅「五月蝿い黙れ！」

俺はデビルブリンガーから巨大な腕を出しバーサーカーを投げ跳ばした

バァン

彩雅「どうしたバーサーカーこんなものか？」

バーサーカー「■■■■■！」

バーサーカーは立ち上がると再度突撃してくる

彩雅「万華鏡写輪眼」

俺は万華鏡写輪眼を開眼し

彩雅「死ね天照！」

バーサーカーに天照を放った

バーサーカー「■■■■■■■！」

バーサーカーは全身黒炎に包まれ呻き声のような声をあげているようだ

彩雅「さてこれでまず一回だな」

俺はイリヤを見て言う

イリヤ「そうね驚いたはこんなに速くバーサーカーを一回殺す何て、お兄さん何者なのそれにその腕も？」

イリヤが目を細め笑いながら俺に言う

彩雅「人間だよ　少し人間離れしてるだけで」

イリヤ「面白いお兄さん」

凛「彩雅君貴方本当に人間？それとどういうこと一回殺したって？」

彩雅「バーサーカーの宝具の能力は１２回までなら死んでも蘇生出来るんだよ。それと俺は人間だ」

凛「本当かしら、後１１回アイツを殺さないといけないということ？」

彩雅「まぁそういうことになるな」

衛宮「あんなのを後１１回も殺さないといけない何て」

セイバー「私達も手伝いましょうかサイガ？」

彩雅「いらんむしろ邪魔になるから手を出すな、それにそっちの弓兵にその気はないようだしな」

アーチャー「・・・・」

アーチャーはさっきから警戒した目で俺を見ている

イリヤ「お話は終わった？」

彩雅「あぁ終わったがイリヤ君に頼みがあるんだが」

イリヤ「何見逃してくれとでも？」

彩雅「あぁただし俺がバーサーカーを後三回殺したらな」

イリヤ「いいよやれるものならね」

彩雅「一瞬で終わらせてやる。こい閻魔刀！」

デビルブリンガーから閻魔刀が出現し俺は閻魔刀を握る

彩雅「さぁて始めよう」

イリヤ「やっちゃえバーサーカー」

バーサーカー「■■■■■！」

灰になっていたバーサーカーが蘇生し俺に向かって来る

彩雅「鉄塊　剛」

俺は最高硬度の鉄塊を使い闇魔刀を振るった

ガキィィィン

バーサーカーの斧剣と激突し

彩雅「まだまだ！」

そのままもうラッシュ

彩雅「さぁバーサーカーどちらが先に剣を落とすかな？」

バーサーカー「■■■■■■■！」

ひたすら剣と刀がぶつかりあう

イリヤｓｉｄｅ

バーサーカーが一回殺られてしまった

あのお兄さん思ったよりずっと強い

恐らく此所にいるお兄ちゃん達より遥かに強いと思う

それにあの腕あれは恐らく人間の物ではない

でも勝つのは絶対私のバーサーカーだよ

私はそう信じてバーサーカーとお兄さんの戦いを見る

イリヤｓｉｄｅ　ｏｕｔ

衛宮ｓｉｄｅ

あり得ない。今目の前で戦っているのはいつもの彩雅には思えなかった

あのバーサーカー相手に彼処まで戦える何て

それに今持っているあの刀は

衛宮「解析開始（トレース・オン）」

俺はあの刀を解析したがはっきり言って謎だ

作られた経緯など全て不明であり名前も分からない

だが分かったことはあれは人を斬る為の物ではないということだ

もっと異質な何かを斬る為の刀のようだ

何故彩雅はあんな物を持っているんだ？

俺は再び二人の戦闘を見る

衛宮ｓｉｄｅ　ｏｕｔ

凛ｓｉｄｅ

何なの一体彼は一体何者なの？

私の頭の中は混乱していたあのバーサーカー相手に恐怖もなしに戦っている彩雅君に

それに彼の片腕がいきなり変わったと思ったら巨大な魔力を出していた

彼は本当に人間なの？今の戦いを初めて見た人は彼を人間だと思わないだろう

それにバーサーカーの真名と宝具を何故知っていたのも気になるし

戦いが終わったら彼を問い詰めてみよう

私は二人の戦闘を再び見る

凛ｓｉｄｅ　ｏｕｔ

セイバーｓｉｄｅ

セイバー「彼は一体？」

私は今のサイガとバーサーカーの戦いを見て唖然としている

パワースピード共に最強と言えるバーサーカー相手に人間であるサイガが互角に戦っている

彼は一体何者なのだろう？本当に彼は人間なのだろうか？

私は疑問を持ちながら再び二人の戦闘を見る

セイバーｓｉｄｅ　ｏｕｔ

アーチャーside

アーチャー「奴は一体」

私は自分の目を疑った。どう考えてもまともに戦えないバーサーカーと戦っている彩雅を見て

何故奴は彼処まで戦える？英雄でも英霊でもないただの人間の奴がそれに奴の今の表情は恐怖など微塵もなく戦いを楽しんでいるように見える

だが気がかりなのは奴がバーサーカーの真名と宝具を知っていたこと。私の予想では恐らく奴は全てのサーヴァントの真名と宝具を知っていると思う

少し探りを入れたほうがよさそうだな

私は再び二人の戦闘を見る

アーチャーside　out

彩雅「はぁ！」

ガキィィィン

どのくらい時間が経っただろうか？

一体何回打ち合ったのだろうか？

だがそんなこと以前にさっきから自然と笑みがこぼれる

彩雅「楽しいな」

暫く手応えのある相手と戦闘をしていなかったのか非常に楽しく思えてしまう

バーサーカー「■■■■■！」

彩雅「ハハハそら行くぜ！」

斧剣を弾き闇魔刀を右腕に持ちデビルブリンガーで正拳を放ちバーサーカーをぶっ飛ばす

バーサーカー「■■■■■！」

彩雅「さてじゃあ終わらせるとしようデビルトリガー」

全員「何だあれは！」

見た奴等全員が驚いている

今の俺は全身から青い炎が出ており背後に牛のような悪魔がいるからな

彩雅「ハハハさて行くぜ！」

バーサーカー「■■■■■！」

突撃してくるバーサーカーに俺も突撃する

彩雅「そらー！」

ガキィィィン

闇魔刀と斧剣がぶつかった後

ズバッ

背後の悪魔が斬撃を放ちバーサーカーを一刀両断した

彩雅「後二回」

バーサーカー「■■■■■！」

バーサーカーはすぐに蘇生し向かってくる

彩雅「こりねぇ奴だな」

再び剣がぶつかり悪魔が刀を振るったが

ガキン

バーサーカーはそれを普通にガードした

彩雅「甘いは！」

闇魔刀に魔力を溜め渾身の斬撃をバーサーカーに放った

ズバンッ

バーサーカーは見事に真っ二つになった

彩雅「後一回」

イリヤ「バーサーカー狂化しなさい！」

バーサーカー「■■■■■■■！」

彩雅「何！」

バーサーカーがさっきとは比べものにならないスピードで俺に突撃してきた

彩雅「このー！」

俺は閻魔刀を振るったが

ガキン　ザク

彩雅「何がは！」

バーサーカーに閻魔刀が弾き跳ばされ俺はバーサーカーの斬撃をもろにくらい吹っ飛ばされた

彩雅「これが本気のバーサーカーか面白い！」

俺は再びバーサーカーに向かう

彩雅「はぁ！」

ガキィィィン

デビルブリンガーで力の限り斧剣とぶつける

彩雅「おらおら！」

退いては敗けるなら攻めるのみ！

俺はバーサーカーの斧剣を殴り続ける

彩雅「跳べー！」

ガキン

バーサーカーの斧剣を弾き跳ばさし

彩雅「ジャックポット！」

全魔力を込めた渾身の一撃をバーサーカーに放った。

バァァァン

その一撃は見事バーサーカーの身体を貫き吹き飛ばした

彩雅「これで終わりだ」

俺はデビルトリガーを解除し弾かれた闇魔刀を回収する

彩雅「これで見逃してくれるよなお嬢さん？」

イリヤ「約束だから今回は見逃してあげるね。でも次はお兄さん共々お兄ちゃん達も殺すから覚悟しといてね。行こうバーサーカー」

イリヤはそう言うとバーサーカーの肩に乗り俺はその後に

彩雅「イリヤこれを持ってろ」

俺は創作で鉄砕牙の鞘を小さくした物をイリヤに投げ渡した

イリヤ「何か分からないけどありがとうお兄さん。じゃあ行こうバーサーカー」

イリヤとバーサーカーは何処かに消えた何か嫌な予感がしたので闇魔刀を消しデビルブリンガーを普通の腕に戻し帰ろうとしたが

凛「彩雅君貴方は一体何者なの？そしてさっきあれは何？」

セイバー「説明願いますサイガ」

衛宮「俺にも説明してほしいな」

アーチャー「私にもな」

四人が俺に問い詰めてくるが

彩雅「まだ説明出来ない以上」

俺はそう言うと六式の剃を使いその場から逃走し自宅に向かった

彩雅「ただいま」

桜「おかえりなさい彩雅さんってどうしたんですかその怪我！」

自宅に帰ったら桜が驚いていた。まぁ口には血の跡がありバーサー

カーの攻撃くらって全身ボロボロの状態だったからな

彩雅「あぁ大丈夫だから心配するな」

桜「大丈夫なわけないですよ！」

桜に腕を掴まれると居間に連れていかれた

彩雅「大丈夫だってこれぐらい」

桜「駄目ですちゃんと手当てしないと」

俺はその場に座らせられると桜が手当てをしてくれた

桜「これで大丈夫ですよ。あまり怪我をしないでください」

何か桜が泣きそうな顔をしている何でだ？

彩雅「えっとごめん桜」

桜「え！」

俺は桜を優しく抱きしめた

桜「ええっと彩雅さん／／／？」

彩雅「悪いあまり怪我しないようにするからさ。心配かけてごめんな」

桜「はい」

そのすぐ離れたら桜が残念そうな顔をして俺を見ていた何でだ？

その後眠くなったので俺は部屋に戻り就寝した

狂戦士ＶＳ彩雅（後書き）

次回は予想外のことを彩雅君はやります

サーヴァント召喚（前書き）

あのサーヴァントを彩雅は召喚します

サーヴァント召喚

彩雅「何かなぁ」

桜「どうかしたんですか彩雅さん？」

彩雅「いや何でもない」

桜「？」

現在桜と登校しているのだが何かさっきから殺気を感じる

恐らくライダーだと思うがまぁ気にしないでおこう

女子「夜月先輩おはようございます」

彩雅「あぁおはよう」

女子「キャー夜月先輩挨拶かえしてくれた」

彩雅「？」

何か挨拶かえしただけで騒がしいな

彩雅「何で女子はあんなに騒いでるんだ桜？」

桜「彩雅さん学校では全く喋らないし、ほとんど女子の言うこと無視してますから」

彩雅「あぁそういうことか」

桜「それに彩雅さんかっこいいですから」

彩雅「そう？」

桜「はい」

彩雅「まぁどうでもいいけど」

その後も学校に着くまで挨拶をかえしたら（ほぼ女子に）やはり騒がしくなった

挨拶をかえすたびに桜が不機嫌そうな顔をしている何で？

衛宮「よう彩雅に桜」

凛「おはよう桜に彩雅君」

彩雅「あぁおはよう衛宮に凛」

桜「おはようございます衛宮先輩に遠坂・・・先輩」

やはり桜の凛への呼び方が不自然だな

普通なら姉妹何だからお姉ちゃんやお姉さん、姉さんと呼びたいのだろうが、桜自身が恐らくそう言ってはいけないと思っているのだろう

凛「ところで彩雅君昨日のことを聞きたいんだけど」

衛宮「あぁ俺も」

桜「昨日のことって？」

凛「桜には関係ないから気にしないで」

桜「？」

彩雅「まだ話す時じゃないから話す気はない」

俺はそう言い走り出した

彩雅「まだ俺がこの世界の人間じゃないと話す時ではないからな」

そう呟いて俺は学校に行き自分の教室に向かった

彩雅「勉強何てやってられないよな」

勉強は影分身に任せて俺は屋上にいる

だって本当は俺は二十歳だし教育はちゃんと受けてたからな

彩雅「でいつまで俺を見ている気だ」

視線の感じる方向に目を向け言うと

?「・・・・・」

一人の目を隠した女がそこから現れた

彩雅「朝から何の用だライダー?」

ライダー「!何故私がライダーだと分かったのですか?」

ライダーが戦闘大勢に入り聞いてきた

彩雅「俺が言うと思うか?ゴルゴン3姉妹の末妹・メドゥーサ」

ライダー「何故私の真名まで!」

ライダーからかなりの殺気がむけられてくる

彩雅「だから俺が言うと思うか？」

ライダー「思いません」

ライダーが戦闘大勢で構えてくる戦う気はないのだがな

彩雅「俺は戦う気はない。後ついでに学校に展開している鮮血神殿（ブラッドフォート・アンドロメダ）を解除しろ」

ライダー「私の宝具まで知っているとは貴方は本当に何者ですか？」

彩雅「ちょっと人間離れした人間だ」

ライダー「貴方は人間離れしすぎなのでは？」

彩雅「そんなことはないさ」

ライダー「バーサーカーを四回殺していてはそうは思えないのですが」

彩雅「な何のことだ？」

ライダー「とぼけても無駄ですよ。この間のバーサーカー戦は見させてもらいましたから」

彩雅「ち見られてたのか俺も修行が足りんようだな」

ライダー「それと何故貴方は桜を家に泊めているのですか？」

彩雅「アイツを爺から引き離す為と救う為だ」

ライダー「貴方は桜の身体のことを知っているのですか！」

彩雅「あぁ爺が心臓に聖杯の欠片から作った刻印蟲と、爺本体とも言える蟲を植え付けてるんだろ」

ライダー「貴方はそれを知っているから桜を泊めていたのですか」

彩雅「それにマスターがあんな風になってたらお前が辛いだろ」

ライダー「桜が本当のマスターということも知っているんですね」

彩雅「ライダー俺は桜を救う。だから俺に力を貸してくれないか？」

ライダー「桜を救う方法があるのですか？」

彩雅「あぁまだ教えられないが方法は一応ある」

ライダー「それが成功すれば桜を救えますか？」

彩雅「あぁ恐らく救える」

暫くの沈黙の後

ライダー「・・・・分かりました。桜の為に貴方に協力しましょう」

彩雅「助かる。それじゃあまず恐らく慎二の命令だと思うが鮮血神（ブラッドフォート・アン）殿（ドロメダ）を使用するなよ」

ライダー「やはり慎二が仮のマスターだということも知っていましたか。分かりました」

彩雅「よしなら後は特にないな」

ライダー「私を完全に信用していいんですか？もしかしたら裏切る

かもしれないというのに」

彩雅「お前が裏切ろうが俺は桜を救う。それを邪魔する奴は全て排除する」

ライダーを睨みながら言う

ライダー「貴方の覚悟本物のようですね、誓いましょう私は貴方を裏切らないということを」

彩雅「そうかありがとうなライダー」

ライダー「その代わり必ず桜を救ってください」

彩雅「あぁ後ライダー俺の名前は夜月彩雅　彩雅と呼んでくれ」

ライダー「では彩雅いつ行動するのですか？」

彩雅「あぁ恐らく今日の夜中に行動するだろう。その時は頼んだぞライダー」

ライダー「分かりました彩雅では夜玄関の前で待っています」

彩雅「あぁ了解した」

ライダー「それでは私は此れで」

ライダーはそう言うと何処かに消えた

彩雅「これでライダーは味方に出来たな。さてアーチャー出てきたらどうだ？」

アーチャー「いつから気付いていた？」

彩雅「最初からだ。どうも今日はサーヴァントがよく訪ねてくるな。それで俺に何の用だ？」

アーチャー「貴様は何者だ？」

アーチャーはそう言うと干将・莫耶を構えた

彩雅「戦闘する気は無いぞ英霊エミヤ」

アーチャー「何！貴様何故知っている？」

アーチャーが今にも襲いかかってきそうな状態で言ってきた

彩雅「さぁな言う気はない。それと自分殺し何か止めろそんなことしたって何も変わらんぞ」

アーチャー「断る。私はあの愚かな理想を抱いた自分自身を消しさらねば気がすまんのだよ」

彩雅「好きにしろ。だが俺はお前が衛宮を殺そうとするのなら、俺がお前を殺す覚えておけ」

アーチャー「出来るものならやってみるがいい。私は必ず衛宮士郎を殺す誰に邪魔をされてもな」

彩雅「消えろ今の俺はお前のせいで機嫌が悪い」

アーチャー「言われなくてもそうするさ」

アーチャーはそう言うと何処かに消えた

彩雅「アイツもやはり気にくわないな」

そう呟いて俺は目を綴じ眠りについた

彩雅「もう夕方か」

目を覚ますと辺りはもう暗くなっていた

彩雅「帰るとしますか」

とりあえず下駄箱に向かい靴を履き替えようとしたら

桜「彩雅さん」

彩雅「うん？」

後ろを向くと桜と衛宮　凛がそこにいた

凛「アンタ途中で何処に行ったの探したのよ？」

そう言えば影分身は全授業終わったらトイレに行って消えるように言っていたな

彩雅「ちょっと色々あってな」

衛宮「まぁとりあえず帰ろう」

俺達はその後四人で帰った

桜「じゃあ衛宮先輩・・・遠坂先輩また明日」

衛宮「あぁまた明日な桜」

凛「じゃあね桜」

彩雅「桜後で話があるから居間にいてくれ」

桜「はい分かりました」

二人に用事があったからとりあえず桜を先に帰しておいた

凛「で何？私達に用事って？」

衛宮「何か相談事か？」

彩雅「ちょっと衛宮の道場で話をしたいがいいか？」

衛宮「別にいいが」

凛「私もいいわよ」

その後俺達は道場に向かった

凛「で用件は何？」

彩雅「ちょっとまてこれで」

ザク

その場に剣を刺し結果をはるのにとりあえず成功した

衛宮「何で結果何てはるんだ？」

凛「どういうつもりなの？」

彩雅「単刀直入に言う凛俺にサーヴァント召喚の呪文を教えてくれ」

凛＆ａｍｐ；衛宮「はぁ？」

凛「彩雅君本気で言ってるの？」

彩雅「あぁ本気だ」

衛宮「どうしてそんなことを聞くんだ？」

彩雅「サーヴァントが全部召喚された状態で、サーヴァント召喚をするとどうなるか知りたいからだ」

凛「まぁいいわよ」

衛宮「遠坂いいのか？」

凛「別に何もおきないと思うからいいでしょ」

衛宮「確かにそうだな」

彩雅「それで召喚の呪文は？」

その後凛に呪文を聞いた後魔法陣を書きその近くに立つ

俺に魔力があるかは知らんがとりあえずやるだけやろう

彩雅「告げる
　汝の身は我が下に　我が命運は汝の剣に　聖杯の寄るべに従い
この意　この理に従うならば応えよ
　誓いを此処に

　我は常世総ての善と成る者
　我は常世総ての悪を敷く者
　汝三大の言霊を纏う七天
　抑止の輪より来たれ　天秤の守り手よ！」

そして最後に

彩雅「何でもいい来い！」

そう言った瞬間魔法陣にかなりの魔力が集められていき何かを形づくっていた

凛「何まさかサーヴァントが召喚されるんじゃ！」

衛宮「どうなってるんだ！」

彩雅「まさかな」

俺達が驚いているとそこに一人の二つの槍を持った男が出現した

？「問おう貴殿が私のマスターか？サーヴァントランサー召喚に応じ参上した」

そこに立っていたのは第四次聖杯戦争のランサー　ディルムッド・オディナだった

作者「ランサーが二人になってしまったのでディルムッドのほうはゼロランサーと呼びますね」

彩雅「あぁ俺がお前のマスターだ」

ゼロランサー「貴殿の名前は？」

彩雅「夜月彩雅」

ゼロランサー「では彩雅様」

彩雅「彩雅でいいぞゼロランサー」

ゼロランサー「いえマスターである貴方の名前を呼び捨てでなど呼べません」

彩雅「けっこう律儀な奴だな。まぁいい宜しくなゼロランサー」

ゼロランサー「はいところで彩雅様あの二人は知り合いですか？」

彩雅「あぁそうだ。手を出すなよゼロランサーアイツ等は俺がいてくれと頼んだのだからな」

ゼロランサー「承知しました」

凛「どうなってるの？」

ゼロランサーを見ながら凛が俺に聞いてきた

彩雅「俺が知るわけないだろ」

衛宮「本当彩雅はわけが分からないな」

彩雅「別に俺はわけ分かんなくないだろ」

凛＆ａｍｐ；衛宮「十分わけ分かんない」

彩雅「それ言われるとけっこうへこむ」

剣を抜き結界を解除して俺達は道場から出た

その後俺は自宅に戻った（無論ゼロランサーは霊体化させている状態）

サーヴァント召喚（後書き）

この彩雅のサーヴァント召喚によりストーリーが変わってきます

では次回も楽しんで読んでください

蟲退治と忍び寄る影（前書き）

やっと更新出来ました

今回はあるサーヴァントを彩雅は自身のサーヴァントにします

では楽しんで読んでください

蟲退治と忍び寄る影

彩雅「桜話というのはな」

桜「はい」

現在居間で桜と俺は向かいあっている

彩雅「お前の身体のことだ」

桜「え！」

桜が驚きどうして知っているという顔をした

彩雅「何故知っているのかは言えないが、このままだとまずいということは分かるだろ」

桜「はいでも私・・・・」

彩雅「何だ？」

桜「私のせいで彩雅さんを危ない目にあわせたくなくて」

彩雅「桜だがお前の身体に爺と聖杯の欠片を残しておくわけにはいかないんだ」

桜「・・・・彩雅さんは無事に戻ってきますよね」

桜が悲しそうな顔で俺を見てきた

彩雅「あぁ俺はちゃんと帰ってくるよ」

桜「約束・・・・ですよ」

彩雅「あぁ約束するよ」

桜「じゃあ・・・・私を助けてください」

桜はそう言うと俺に抱きついてきた

桜「ずっと怖かったんです。身体の中の蟲が動きまわることや地下

でお爺様の魔術の調整をされ続けたことが」

桜は震えていた。ずっと我慢していたのか、誰にも相談出来ず全部一人で抱えこんで、そして今ようやく打ち明けてくれた

彩雅「あぁもう大丈夫だ今日全て終わらせるから」

俺は桜を抱きしめながら言った。必ず終わらせてやるこの子を苦しみから

暫くした後俺は桜から離れた

彩雅「まず桜お前の中の聖杯の欠片と爺本体の蟲を取り出す」

桜「そんなこと出来るんですか？」

彩雅「あぁついでに身体の蟲も消えるだろう」

名が無き刀を抜き桜に向ける

桜「彩雅さん？」

彩雅「桜悪いがちょっと我慢してくれ」

ザク

桜「え！」

名が無き刀で桜の心臓を貫いた

桜「どうして？」

彩雅「・・・・」

その後刀を抜くと二体の蟲が床に落ち桜は気絶し倒れた。俺は落ちた蟲にすぐあることをした

彩雅「ゼロランサー」

ゼロランサー「彩雅様何でしょうか？」

俺は霊体化しているゼロランサーを呼んだ

彩雅「恐らく爺のサーヴァントが桜を狙って此所に来るはずだ。お前は此所に残り桜を守ってくれ」

ゼロランサー「しかしそれでは彩雅様が！」

彩雅「俺は心配いらん桜との約束もあるしな。それに従わないなら令呪を使うまでだ」

ゼロランサー「・・・・分かりました。桜様は必ず私がお守り致します」

ゼロランサーは何とか納得してくれた

彩雅「頼んだ。あぁ後やってきたサーヴァントは殺さない程度に痛めつけて捕獲してくれ」

ゼロランサー「承知しました」

彩雅「じゃあ頼んだぞ」

桜の防衛をゼロランサーに任せ俺は桜の家に向かった

彩雅「此所が桜の家か」

桜の家は俺の家より立派ででかかった為少し腹がたった

ライダー「彩雅お待ちしてました」

玄関に向かうとライダーがそこに居た

ライダー「桜の身体のほうは何とかなりましたか？」

彩雅「あぁ身体のほうは成功した。後は爺を排除するだけだ」

ライダー「そうですかありがとうございます。では間桐臓硯の元へ案内します」

ライダーが玄関を開け室内に入ったので俺もそれに続いた

室内も普通に立派で高そうな物がけっこう置いてあった

ライダー「此所です。此所に間桐臓硯はいます」

地下室の扉の前でライダーが言った

彩雅「そうか、此所からは俺だけでいい。ライダーは此所で待っていてくれ」

ライダー「しかし！」

彩雅「問題ない大丈夫だ」

少しの沈黙の後

ライダー「分かりました。気をつけてください」

ライダーが了承してくれた

彩雅「あぁ」

俺は地下室の扉を開け中に入った

室内は暗くそして一人の老人がそこにいた

彩雅「間桐臓硯だな？」

臓硯「若者よこんな老人に何のようかの？」

臓硯が笑いながら俺に聞いてくる。コイツの笑い方も気にくわないな

彩雅「お前を殺しに来た」

そう言い俺は万華鏡写輪眼を開眼し烈火の剣を作り出し構える

臓硯「儂を殺せるのか？儂が命令をすれば桜の心臓にいる蟲が心臓を食らうぞ」

彩雅「残念だがそれは無理だ」

臓硯「何！」

彩雅「何故ならお前の蟲なら此所にいるからよ」

ポケットから蟲の入った瓶を取り出し臓硯に見せる

臓硯「馬鹿な！何故桜の体外から出ていないはずの儂の刻印蟲がそのようなところに！」

彩雅「残念だったな爺」

臓硯「どうやって儂に感ずかれずに体外から出したのだ？」

彩雅「出した瞬間に幻術をかけてな、お前はまだ桜の心臓にいると蟲に錯覚させたのさ」

臓硯「だがまだ手はある。今アサシンが桜を捕らえているころの筈」

彩雅「残念だがそれも失敗したようだが」

臓硯「何馬鹿な！アサシン　アサシン」

彩雅「呼んでも無駄だろう俺のサーヴァントが捕らえたからな」

臓硯「何！何故貴様がサーヴァントを！」

俺は烈火の剣を構え臓硯に近づく

彩雅「これから死ぬ奴に教えることはない」

臓硯「ならかくなる上は貴様だけでも始末する」

爺がそう言った瞬間まわりからかなりの数の蟲達が俺に近寄って来た

彩雅「蟲は好かん消えろ！」

烈火の剣から炎をまわりに放出し蟲をほぼ焼きつくし

彩雅「火遁鳳仙火！」

残った蟲達を鳳仙火で焼き殺し再び臓硯を見る

臓硯「ば馬鹿な！」

彩雅「お前は一度でも桜の気持ちを考えたことがあるか？蟲による拷問を受け続けた桜の気持ちを？」

爺に近づきながら問う

臓硯「間桐の魔術に馴染ませる為にやったことだ！」

彩雅「桜の気持ちは関係ないのか？」

臓硯「全てはマキリの為だ！一人の小娘の気持ちなど知ったことか！」

彩雅「消えろ屑天照！」

臓硯「ぐわー！」

臓硯の身体を黒炎が包み込み臓硯が悲鳴をあげている

彩雅「人の気持ちを無視する奴は生きている価値などない」

臓硯「馬鹿な・・・マキリがこんなところで終わる筈がぐわー！」

あっという間に黒炎によって爺は灰になっていた

彩雅「後はこの蟲を消すだけだな」

俺は瓶の中の二匹の蟲に天照を放ち焼き殺し瓶の中には灰だけが残った

彩雅「これで完全に桜を救うことが出来たな」

だが何だろう何か違和感がある。何か誰かにずっと見られてたような気が

彩雅「気のせいか」

そう呟いて俺は地下室を後にした

誰かに見られていたことも知らずに

ライダー「彩雅無事でしたか！」

彩雅「あぁ爺は殺した。もう桜は大丈夫だ」

ライダー「ありがとうございます。桜を救ってくれて」

彩雅「約束したからなまぁ救えてよかったよ」

ライダー「本当にありがとうございます」

ライダーが何回も頭を下げてお礼を言っている

彩雅「さてじゃあワカメの本消して行くぞライダー」

ライダー「何処にですか？」

彩雅「俺の家」

ライダー「いいのですか私が居ても？」

彩雅「別に構わないよ。桜もライダーがいたほうが嬉しいだろうからな」

ライダー「彩雅がいいのなら貴方の家に行かせてもらいます」

彩雅「分かったじゃあ屑ワカメの部屋に案内してくれ」

ライダー「こっちです」

ライダーに案内され屑ワカメの部屋に向かった

彩雅「この部屋か？」

ライダー「はい」

彩雅「入るぞ慎二」

慎二「ぐあ！」

扉を蹴破り中に侵入すると

慎二「な何だ夜月！何でお前が僕の家にいるんだ？」

ワカメこと間桐慎二が頭から血を流しそこに立っていた

彩雅「五月蝿いぞ屑とりあえず俺に偽臣の書を渡せ」

慎二「な何でお前が偽臣の書のことを知ってるんだ！？」

彩雅「言っておくがお前に拒否権はない。おとなしく俺に渡すかそれとも・・・・」

慎二「ライダーコイツを殺せ！」

慎二が偽臣の書を出しライダーに命令した瞬間

バシッ

慎二「え！」

彩雅「じゃあこれは貰うからな」

俺は剃で慎二の元へ一瞬で移動し偽臣の書を奪った

慎二「か返せ！それがそれが無いと僕は！」

彩雅「馬鹿な奴だな。そこまでしてまでマスターになる必要などないだろ」

偽臣の書を鳳仙火で燃やし呟く

慎二「あぁ僕の令呪が僕の」

ワカメは燃えた偽臣の書を見ながら膝をついていた

彩雅「さてこれで本当のところ帰るんだが、お前は桜に酷いことを平然としていたからな」

殺気を出しながらワカメに近づいて行くと

慎二「ゆ許してくれた頼む！」

ワカメが血が出てる頭を床に当てながら土下座し俺に助けをこう

彩雅「今後一切桜に何か妙なことをしてみろお前を味噌汁の具にしてやるからな」

俺はそうワカメに告げた後呆然としているワカメを放置し、ライダーと一緒に自宅に向かった

戻っている途中片腕がない女が道端で倒れていた

彩雅「あれはバゼットか？」

おかしいなバゼットは確かどっかで建物の中で倒れてた気がしたんだが

彩雅「細かいことは言ってらんないなライダー彼女を保護するぞ」

ライダー「帰ったら桜が怒ると思いますよ」

彩雅「どうして？ただ助けただけって言えばいいだろ」

ライダー「鈍感のようですね」

何かライダーが呆れて言ってきた

彩雅「まぁとりあえず帰るぞ」

ライダー「はい」

俺はバゼットを背負いライダーと自宅を目指した

彩雅「はぁやっとついた」

ライダー「此所が貴方の家ですか？サーヴァントの気配を中から感じるのですが？」

彩雅「あぁ多分俺のサーヴァントと爺のサーヴァントの気配だろ」

とりあえず中に入ると

彩雅「ただいま」

桜「彩雅さん無事です・・・・」

桜がバゼットを背負っている俺を見て一瞬固まったがすぐに元に戻ったようだ

桜「その背負ってる人は誰ですか彩雅さん？」

あれ何か桜さっきと違って顔が凄い怒ってるよ何故だ？

彩雅「えっとこの人は」

ライダー「道端で倒れていたので保護したんですよ桜」

桜「ライダー来てくれたの」

ライダー「はい彩雅に助けられました。私も此所に住むので宜しく桜」

桜「よかったライダーも彩雅さんも無事で」

彩雅「とりあえず居間に行かないか？話があるからさ」

桜「分かりました」

ライダー「はい」

二人は居間に向かい俺はバゼットを部屋に寝かせた後向かった

居間に向かったら何故か両腕を縛られて座っているアサシンとその首に槍を向けているゼロランサーがいた

ゼロランサー「彩雅様ご無事でしたか！」

彩雅「あぁお前も無事かゼロランサー？」

ゼロランサー「この程度の敵に敗ける私ではありません」

彩雅「ならよかった。あぁ桜　ライダー紹介しよう俺のサーヴァントのゼロランサーだ」

ゼロランサー「始めまして桜様にライダー」

桜「えっと間桐桜です。先程はありがとうございました」

桜が自己紹介しお礼を言い

ライダー「ライダーです。桜を助けてくれてありがとう」

ライダーも自己紹介し軽く頭を下げてお礼を言う

ゼロランサー「ところで彩雅様捕らえたこのアサシンはどうします？」

どうしたものだろうか？まぁ一応話をしよう

彩雅「アサシンお前はこれからどうする？」

アサシン「マスターは貴方が殺したのでしょう？なら私に行くところはありません」

彩雅「なら俺達の仲間になれアサシン」

アサシン「何故私を仲間に？敵の私を？」

彩雅「今のお前はもう敵ではないそれに」

アサシン「？」

彩雅「犠牲は出来る限り出したくないんだよ。助けられる奴は助けたいんだ！」

この世界に来る時に心に決めたこと、助けられるなら必ず助ける。それが俺の心に決めたことだから

アサシン「・・・分かりました。貴方のその言葉を信じます。私の力をお使いください」

彩雅「ありがとうなアサシン」

契約をしアサシンが新たに俺のサーヴァントになった

彩雅「ゼロランサー縄をほどいてやれ」

ゼロランサー「分かりました」

ゼロランサーは持っていた槍で縄を切り俺の後ろに下がった

彩雅「改めて宜しくなアサシン」

アサシン「こちらこそ彩雅様」

お互い握手をした後アサシンは桜に土下座をし謝っていた

アサシン「本当に申し訳ありませんでした」

桜「もういいですよアサシンさん。それよりこれから宜しくお願いしますね」

アサシン「はい宜しくお願いします」

ライダー「桜が許すのなら私も許しましょうアサシンこれから宜しく」

アサシン「はい」

こうして新たにアサシンが仲間に加わり現在俺の家にはサーヴァン

トが三人いる状態になった

彩雅「あぁ今日はもう疲れう！」

ベットに横になろうとしたら俺は意識を失いその場に倒れた

何処かの裏道

？「あれほどの人間がいるとはこの町は中々興味深い。それにサーヴァントなるものも」

？「実際見てみたがあの人間は蟲の塊と数えきれない蟲を普通に殺していた。それにあのサーヴァントなるものも奴の情報では中々の強さを持っているらしい」

彩雅のやりとりを見ていた男達が話している

？「どうする仕掛けてみるか？」

？「いやもう少し様子を見てみようじゃないか」

？「本当は今すぐにでも喰らいたいのだがまぁ我慢するとしよう」

彩雅とサーヴァントを狙う男達の存在は無論まだ彼等は知らない

蟲退治と忍び寄る影（後書き）

次回はまた更に力をもらい彩雅がチートになっていきます

では次回も楽しんで読んでください

更なる力と管理者の企み（前書き）

今回は短いですが楽しんで読んでください

更なる力と管理者の企み

彩雅「此所は最初の」

目が覚めまわりを見るとそこは辺り一面白い世界Ｆａｔｅの世界に行く前の所に俺はいた

彩雅「管理者いるんだろ？出て来いよ」

管理者「やぁ彩雅君」

管理者が笑いながら俺の元へ来た

管理者「君が予想外のことをしたせいで、ちょっとよくないことがおきそうだからこうしてまた呼んだんだよ」

彩雅「よくないことだと？」

恐らく俺がゼロランサーを召喚したことや、桜を早急に救ったことが原因だろう

管理者「あぁ何故か先程全サーヴァントの力量が大幅に上がってね。そしてそれに対抗する為に君に何かまた力を与えようと思ってな」

彩雅「ではナルトの忍術を全てと白眼などの眼類も全て使用可能、それとＢＬＥＡＣＨの技と能力、死神の鬼道とアランカルの技と刀剣解放の力を全て使用可能にしてくれ」

管理者「本当にそれだけでいいんだな？もう能力を増やすことは出来なくなるぞ？」

まだ力増やしてもいいってやっぱりコイツは凄い奴のようだ

彩雅「いいそれだけあれば十分だ」

サーヴァントの力が上がったのなら念には念を入れておかないとな

それにこれだけあれば誰も勝てんだろ

管理者「了解した」

最初のように管理者の手から光が出てきて俺を包み込んだ

管理者「終了だ。さぁ確認したまえ」

彩雅「黒虚閃（セロ・オスキュラス）」

そう言った瞬間俺の指から黒い虚閃が放たれた

彩雅「次は蹴散らせ群狼（ロス・ロボス）」

唱えると俺の腕には銃が二丁握られていた

彩雅「狼モード」

そう言うと銃は消え狼の姿をした弾頭が出現した

彩雅「最後は風遁螺旋手裏剣！」

普通に言っただけで螺旋手裏剣が瞬時に作り出せた

彩雅「これだけあれば大丈夫だろう」

管理者「あぁそうだなじゃあ君を戻すからな」

彩雅「あぁ」

管理者「想定外の事態がおきる可能性がある。この話以外の敵が現れても動じず倒してくれ」

彩雅「了解」

管理者「それとあまり想定外のことはしないでもらいたい」

彩雅「善処しよう」

管理者「ふんではまた」

管理者がそう言った後俺は意識がなくなった

管理者「彼が想定外のことをし続けるなら修正するまでだ」

管理者が笑いながら呟く

管理者「フフフ清々我が計画の為に動いてくれよ。その為に君にかなりの力を与えたのだからな」

彩雅の知らないところで管理者の謎の計画が進められていることは
無論誰も知らない

目を覚ますと俺は自分のベットに横になっていた

彩雅「サーヴァントの力量アップそして新たなる力、何か裏がありそうだな」

奴が何か企んでるとは思うが今は聖杯戦争のほうに集中しよう

俺は目をとじ眠りについた

更なる力と管理者の企み（後書き）

彩雅君がまた更にチートになりますが同時にサーヴァントもチート並の強さになります

ではまた次回も楽しんで読んでください

輝く貌ＶＳ光の皇子（前書き）

ＶＳランサー戦です

ちなみに戦うのは彩雅君ではありません

輝く貌VS光の皇子

彩雅「このー！」

ゼロランサー「はぁ！」

キィィン

現在森の中で結界をはりその中でゼロランサーと戦闘中

理由はどのくらいサーヴァントの力量が上がったのか確かめる為

彩雅「ちっこいつは上がったってレベルの話じゃないだろ！」

ゼロランサー「ふっ！」

ゼロランサーの二槍と俺の闇魔刀がぶつかる

強さでは恐らく俺と互角いやそれ以上になっている

彩雅「まぁこれくらい強くなってないと面白味がないがな！」

ガキィィィィン

ゼロランサー「流石です彩雅様。本気の私相手にここまで戦えるとは」

彩雅「そんなことはないさ」

キィィィン

１００回ほど打ち合いどのくらい力量が上がったのかは代々分かった

彩雅「ゼロランサー終了だ。ちょっとこっちにこい」

ゼロランサー「はい。何でしょうか？」

戦いを止めゼロランサーを俺の近くに呼んだ

彩雅「お前の宝具を強化してやろうと思ってな」

ゼロランサー「そんなことが可能なのですか！？」

彩雅「あぁ一応な」

何故か知らんが目が覚めた後、管理者に強化かが可能になったと言われたので試す為である

ゼロランサーから二槍を借り強化を開始する

強化は無事に完了した

彩雅「よし完了。ゲイ・ジャルグとゲイ・ボウを強化して能力もプラスしたぞ」

俺は強化した二槍をゼロランサーに渡す

ゼロランサー「ありがとうございます彩雅様」

彩雅「ゲイ・ジャルグは魔力と更に呪力を打ち消し吸収しそれを放つことが出来るようにした。ゲイ・ボウはゲイ・ジャルグの吸収した魔力と呪力を纏わせた状態で宝具を放てば通常より攻撃力が格段に上がるようにしといた」

ゼロランサー「これで私はまた更に強くなることが出来そうです。ありがとうございます彩雅様」

彩雅「なぁに気にするな。さてそろそろ戻るぞ」

ゼロランサー「はい」

俺とゼロランサーは結界を解き自宅に帰ろうとした時

ランサー「ようやく終わったみてぇだな」

目の前にランサーが立っていた

彩雅「何でいんだよ？」

ランサー「マスターからてめぇを始末しろと言われてな、悪いが死んでもらうぜ」

そう言うとランサーはゲイ・ボルグを俺に構える

彩雅「サーヴァントでもない俺を始末とはどういうことだ？」

ランサー「知るか。まぁ正直俺はてめぇと全力で戦ってみたかったからちょうどよかったがな」

彩雅「しょうがないな」

闇魔刀を構えようとした瞬間

ゼロランサー「彩雅様此所は私にお任せを」

そう言いゼロランサーが俺の前に立った

彩雅「やれるのか？」

ゼロランサー「問題ありません。任せてください」

彩雅「なら任せる。だが殺すな生きて捕らえろよ」

ゼロランサー「承知しました」

ランサー「てめぇが俺の相手か？」

ゼロランサー「あぁそうだ」

ランサー「てめぇ人間じゃねぇな、一体何もんだ？」

ゼロランサー「貴様と同じサーヴァントだランサーよ」

ランサー「何！馬鹿なサーヴァントは全て召喚されているはずじゃねぇか？てめぇクラスは何だ」

ゼロランサー「見て分かるだろ私も貴様と同じランサーだ」

ランサー「はっ！まぁ何故もう一人ランサーがいるのかはこの際気にしねぇ。だがランサーは二人もいらねぇ此所で始末してやらぁ！」

ゼロランサー「それは此方の台詞だ！」

ランサーとゼロランサーの戦いが始まった

ゼロランサーｓｉｄｅ

ランサ「そら　そら　そら！」

ゼロランサー「この程度！」

ランサーの突きを私は全て片方の槍で弾く

ゼロランサー「はぁ！」

そしてその後両方の槍で攻める

ランサー「ちっ！」

キィィィン　ガキィィン

だが奴は私の二槍の攻撃と同じ速度で再び攻撃をしてくる

ゼロランサー「流石はランサーと言うところか」

ランサー「テメェもな！」

再び二槍と一槍がぶつかる

二槍を一槍で弾くとはやはりこの男は強いな

スピード　パワー共に恐らく互角

ゼロランサー「だが敗けるわけにはいかんのだ！」

ランサー「はっ！　それはこっちも同じだ！」

だがこのまま戦っていても恐らくただの消耗戦になる

しかし互いに攻めの手を緩めずひたすら攻撃する

ランサー「ちっ！　こんなんじゃきりがねぇな」

ランサーが距離をとりそう呟いた

ゼロランサー「ならば降参するか？」

ランサー「はっ！　その口を我が必殺の一撃で黙らせてやる！」

ゼロランサー「何！」

奴の槍に魔力が集中されていく宝具を使うつもりか？

ゼロランサー「ならば此方も！」

ゲイ・ジャルグに魔力を集中し

ランサー「受けよ！突き穿つ死翔の槍　（ゲイ・ボルグ）！！」

ランサーは高く跳び此方に自身の紅槍を投擲した

かなりのスピードだ！だが

ゼロランサー「ゲイ・ジャルグ！」

ガキィィィィン

ゼロランサー「くぅ」

何とかゲイ・ジャルグをぶつけて止めることが出来たが、奴の紅槍は威力があまり落ちず私は圧されている

だが彩雅様は強化したゲイ・ジャルグは呪力と魔力を打ち消しそれを吸収すると言っていた

ならばこの紅槍の威力がおちるまで耐えるのみだ！

ゼロランサー「このー！」

ゲイ・ジャルグに魔力を集中し耐える。絶対に敗けるわけにはいかんのだ！

ランサー「ちっ！　しぶとい速く倒れやがれ！」

ゼロランサー「そうはいかんのだ！」そしてようやく奴の槍の力が弱まりゲイ・ジャルグに更に魔力を集中させ

ゼロランサー「はぁ！」

キィィィィン

威力のおちた紅槍を弾きとばした

ランサー「何！　馬鹿な我が必殺のゲイ・ボルグを弾くなど」

ゼロランサー「ランサー覚悟！」

ランサー「何！」

一気にまわいをつめゲイ・ボウに先程吸収した呪力を纏わせ

ゼロランサー「受けよ我が一撃を！　ゲイ・ボウ！」

ザシュッ

ランサー「がはっ！」

私のゲイ・ボウがランサーの胸板を貫いた

ゼロランサーｓｉｄｅ　ｏｕｔ

彩雅「どうやらゼロランサーの勝ちのようだな」

見事にゼロランサーは勝った。一瞬ゲイ・ボルグに殺られるかもしれないと思ったがそれは覆された

彩雅「さてゼロランサーもういい下がれ」

ゼロランサー「はい」

ゼロランサーを後ろに下げ俺はランサーに近づく

彩雅「生きてるかランサー？」

ランサー「何とかギリギリだが生きてるっちゃ生きてるな」

彩雅「流石だな」

ランサー「当たりめぇだ。俺を誰だと思ってやがる？」

彩雅「まぁいいとりあえず」

俺は名が無き刀を抜きランサーに向ける

ランサー「ちっ！　ここで終いか」

そして刀を胸板に刺した

ランサー「何だ痛くねぇ？それどころか傷が塞がってやがるじゃねぇか」

ランサーは自分の胸板を見ながら呟く

彩雅「今傷を治してるんだよ」

ランサー「けっ！　何が目的だ？」

彩雅「そんなもんねぇよ。ただ強い奴が消えたら面白くないからだ」

ランサー「馬鹿かてめぇは？」

彩雅「あぁ馬鹿かもな」

ランサーの傷を治し刀を抜くとランサーは立ち上がった

ランサー「一応礼は言っておくぜ」

彩雅「なら俺達の仲間にならないか？」

ランサー「そいつは無理だ。令呪があるんだからよ」

彩雅「ならば契約を切れば仲間になってくれるのか？」

ランサー「まぁあのくそマスターよりてめぇのほうがましだな」

彩雅「なら契約を切ってやる」
俺は破戒すべき全ての符（ルールブレイカー）を作り出しランサーに刺した

ザクッ

ランサー「痛！何だやる気か？」

彩雅「落ち着けランサーこれで契約は切れた筈だ」

ランサー「本当だろうな？」

彩雅「何なら契約してやるが構わないか？」

ランサー「上等だ本当に契約が切れてんならてめぇのサーヴァントになってやるよ」

契約をしランサーがまた新たに仲間になった

ランサー「まさか本当に契約が切れるたぁ驚きだ。その短剣は一体何なんだ？」

彩雅「これは破戒すべき全ての符（ルールブレイカー）あらゆる魔術による生成物を初期の無かった時にもどす対魔術宝具だ」

ランサー「何でてめぇが宝具何か持ってんだよ？」

彩雅「それは秘密だ」

ランサー「はっ！全くえたいの知れない野郎だぜ」

彩雅「ともあれ仲間になったんだ宜しくなランサー」

ランサー「あぁ宜しくなマスター」

彩雅「俺の名は夜月彩雅だ。マスター何て呼ばず彩雅と呼んでくれ」

ランサー「あぁ分かったよ。んじゃ宜しくな彩雅ついでにそっちのランサーもな」

ゼロランサー「私の名はゼロランサーだ。宜しく頼むランサーよ」

ランサー「何か複雑な気分だぜ」

彩雅「まぁそうだな。ところでお前のマスターは言峰でいいんだよな？」

ランサー「あぁそうだが何故知ってんだ？」

彩雅「勘だよ。言峰のところにもう一人サーヴァントがいるのは知っているか？」

ランサー「何！そいつは本当か？」

どうやらまだ知らなていなかったようだな

彩雅「あぁ名は・・・」

名を告げようとした瞬間

ゼロランサー「彩雅様　ランサー左へ回避を！」

彩雅＆ａｍｐ；ランサー「何だ！」

ザクッ　ザクッ　ザクッ

ゼロランサーに言われた通り左へ避けたらさっきまでいた場所に無数の剣が刺さっていた

彩雅「ちっ！来やがったか」

ランサー「何だよありゃよ？」

ゼロランサー「彩雅様まさかあれは」

彩雅「あぁ恐らくそうだランサー　ゼロランサー全速力で俺の家に戻るぞ！」

ランサー「ちっ！後で説明してもらうからな」

ゼロランサー「了解しました」

俺達は自宅に戻る為全力で走り出した

ランサー「ちっ！どんだけ剣や槍が飛んでくんだよ」

ゼロランサー「彩雅様これではキリがありません」

彩雅「当たらないと思った物には手を出さず当たる物だけ弾け！」

ランサー「一体何なんだよありゃよ？」

彩雅「あれは全て宝具だ」

ランサー「な！んな馬鹿なあれだけの宝具を所持してるサーヴァント何か存在すんのかよ！」

彩雅「そのサーヴァントから今攻撃を受けてんじゃねぇか」

ランサー「ちっ！認めるしかねぇのかよ」

ゼロランサー「しかし彩雅様このままでは」

彩雅「ちっ！しょうがねぇな」

俺は宝具が飛んでくる方向を向き

彩雅「蹴散らせ群狼（ロス・ロボス）」

詠唱し一十刃スタークの帰刃の状態になり無数の狼を出現させた

ランサー「何だよその姿はよ？」

ゼロランサー「これが彩雅様の力ですか？」

彩雅「あぁ一応俺の力の一つだ。行け！」

同時に狼の弾頭を宝具が飛んでくる方向に放ち、狼と宝具がぶつかった瞬間大爆発をおこした

彩雅「今のうちだ行くぞ！」

ランサー「全くてめぇはわけが分からねぇ奴だ」

ゼロランサー「はい」

その後も全速力で走り俺達は何とか自宅に帰還することが出来た

森の中

？「逃したかまぁよい面白いものも見れたからな」

クスクスと笑いながら呟く金髪の男

？「次は必ず我が仕留めてやる」

黄金の鎧を身に纏った金髪はそう言うと何処かに消えた

輝く貌ＶＳ光の皇子（後書き）

サーヴァントのチート的な力をこれから見せていくつもりです

では次回も楽しんで読んでください

話し合い（前書き）

やっと更新出来ました。

今回のメインはタイトル通り話し合いです。

話し合い

彩雅「全員集まったな」

とりあえず俺とランサー　ゼロランサーは命からがら自宅に戻った

現在家にいるサーヴァント全員を俺の部屋に入れ全員座っている状態

彩雅「じゃあこれから話し合いを始める」

ちゃぶ台の上に酒とコップを置き俺はそう言った

ランサー「とりあえずさっきのは何か教えてくれ」

ランサーが酒を飲みながら聞いてきた

ライダー&アサシン「さっきのとは？」

彩雅「あぁちょっとゼロランサーと鍛錬してたら襲われてな」

ライダー「怪我はありませんか彩雅？」

彩雅「あぁ特にない」

アサシン「ならよかったです」

彩雅「話を戻すがあれの正体は第四次聖杯戦争のアーチャーだ」

ゼロランサー「やはりそうでしたか」

ランサー「ゼロランサーは奴を知っているみてぇだな」

彩雅「まぁゼロランサーも第四次聖杯戦争のランサーだからな」

三人「な！」

彩雅「おっとそう言えば言ってなかったな」

ランサー「まぁもう何を聞いても驚かねぇよ」

ライダー「しかし何故前の聖杯戦争のアーチャーが今もいるのです？」

アサシン「もしやゼロランサーのように召喚されたのですか？」

彩雅「いや奴は聖杯の中身を飲みほして受肉しているんだ」

ランサー「聖杯の中身を飲みほしただと？」

アサシン「それはどういうことですか？」

彩雅「前の聖杯戦争の聖杯の中身は基本精神などが汚染され自我を失うのだが、奴はそれを圧倒的な魂の力で飲みほし受肉し、現存する為の肉体を手に入れたんだよ」

ライダー「だから今も存在しているのですね」

ランサー「でそいつの真名は何て言うんだ？」

彩雅「人類最古の英雄ギルガメッシュ」

ゼロランサー「ギルガメッシュそれが奴の真名」

ライダー「これはまた凄い英雄が出てきましたね」

アサシン「今の彩雅様の力でギルガメッシュとやらに勝つのは可能なのですか？」

彩雅「恐らく無理だな」

ランサー「マジかよ？」

彩雅「あぁ奴の力は強大だ」

ライダー「ギルガメッシュの宝具は何なのですか？」

彩雅「奴の宝具の名は王の財宝（ゲート・オブ・バビロン）と乖離剣エアだ。ちなみに俺達を襲った宝具の雨は王の財宝（ゲート・オブ・バビロン）による宝具の射出だ」

ランサー「宝具の射出って何でそんなにそいつは宝具何か持ってんだよ？」

彩雅「奴は昔世界の全てを手に入れた後宝具の原典を全て宝物庫に保管したんだ。それを王の財宝（ゲート・オブ・バビロン）を通して空間から取り出しているの

だろう」

ライダー「無茶苦茶ですね」

彩雅「あぁ全く」

ランサー「何か対策はねぇのか？」

彩雅「宝具の雨は弾きまくれば何とかなるが、奴のもう一つの宝具乖離剣エアの威力は強大だ、迂闊に突っ込んでもエアを使われたら恐らく消される」

ランサー「何処までも規格外な野郎だな」

ゼロランサー「全くだな」

ライダー「勝つ手段は今のところあるかのですか彩雅？」

彩雅「あぁとりあえず全サーヴァントを味方にすれば勝機はあるだろう」

アサシン「まだ確認出来ていないサーヴァントはキャスターですね」

ゼロランサー「だが私のように召喚されるサーヴァントがいる可能性もある」

彩雅「そのことは後でいい。今はキャスターを含めてアーチャーとセイバーを味方にすることが目的だな」

ライダー「そうですね」

彩雅「それじゃあ今後の俺達の目的は、全サーヴァントを味方につけるで決まりだな」

ライダー「はい」

アサシン「分かりました」

ランサー「分かったぜ」

ゼロランサー「承知しました」

彩雅「よしじゃあ話し合いは終わりだ。各自部屋に戻ってくれ」

ライダーとアサシン　ゼロランサーは部屋に戻って行ったがランサーはまだ残っている

彩雅「ランサー何か用でもあるのか？」

ランサー「いや全員何でお前がサーヴァントのことをそんなに知っているのか聞かねぇからよ」

彩雅「三人には、今は教えられないが時が来たら話すと言ってあるからな」

ランサー「信頼されてんだな」

彩雅「まぁな。こんな俺だが信頼してくれランサー」

俺は右手を出し

ランサー「あぁしょうがねぇが信頼してやるよマスター」

ランサーはそう言い左手を出し俺とランサーは握手をした

彩雅「この絆を俺は大切にしないとな」

ランサー「お前もそういうこと言うんだな」

彩雅「ふっ　まぁな」

何故か今日はこんな柄にもないことを言ってもいいかななどと思ってしまった

ランサー「そう言えばよバーサーカーはどうすんだ？仲間にするのか？」

彩雅「あぁ忘れてたぜ。あれは可能ならな」

ランサー「可能ならねぇ」

彩雅「まぁ何とかなるだろ」

ランサー「まぁ俺達が何とかしてみせるか」

彩雅「あぁ頼む」

ランサー「あぁじゃあな。彩雅」

ランサーもそう言い部屋に戻って行った

彩雅「この聖杯戦争何がおきるか分からん。十分注意しないとな」

俺はその後就寝した

言峰教会

言峰「つまり貴様達は奴と、奴の周りのサーヴァントを消す為にこの世界に来たと？」

？「そう言うことだ」

？「だが今のところサーヴァントよりあの男が標的だな」

言峰「それで私達に協力をしてほしいと言う訳か？」

？「そういうことだ」

言峰「よかろう。あの男とサーヴァントはどちらにしろ消す予定だからな」

？「感謝する」

言峰「二人は此所を宿の代わりに使ってくれ」

？「くくくすまないな」

言峰「後金髪の男にはあまり近寄るな。機嫌を損ねると厄介だからな」

？「あぁ了解した」

そう言うと二人の男は何処かに消えた

言峰「ふっ使える駒は多いにこしたことはないからな」

言峰は不気味に笑いその場を後にした

言峰達と謎の男二人が協力態勢に入ったことは無論彩雅達は知らない

話し合い（後書き）

次回はイリヤと会い話をします。

では次回も楽しんで読んでください。

イリヤとの会話（前書き）

今回も戦闘ではなく話をするだけです

イリヤとの会話

彩雅「暇だな」

現在やることもなくそこら辺をぶらぶらしている俺

ランサー「だからってぶらぶらする必要はねぇだろ」

今ランサーは霊体化しながら俺について来ている

彩雅「お前のように一日中ごろごろしてるわけにもいかんだろ」

ランサー「別に毎日ごろごろしてるわけじゃねぇよ」

彩雅「そりゃ毎日ごろごろしてたらただのオヤジだしな」

ランサー「ちっ　お前には口では勝てそうにねぇな」

彩雅「口だけじゃなくて勝負でも勝てないだろ」

ランサー「はっ　今度ぶちのめしてやる」

彩雅「出来るものならな」

そんな会話をしながら適当にぶらぶらし、現在公園のベンチで本を顔の上に開いて乗せ寝転がっている

ちなみにランサーは飲み物を買いに行かせた

？「こんなところで何してるの彩雅？」

彩雅「誰だ？」

聞き覚えがある声だったので本を顔からどかし声がしたほうを見ると

彩雅「何も、たた暇つぶしに寝転がってるだけだよイリヤ」

そこには笑顔のイリヤが立っていた

彩雅「戦闘しに来たなら気分がのらないからパスだぜ」

イリヤ「別に戦いに来たんじゃないよ」

彩雅「じゃあ何しに来たんだ？」

イリヤ「彩雅に会いに来たんだよ」

彩雅「俺に？」

イリヤ「うん」

彩雅「どうして？」

イリヤ「お話がしたかったから」

イリヤが笑顔で言う

彩雅「そうかまぁ座れよ」

俺は起き上がり空いているとこを叩きながら言った

イリヤ「うん」

イリヤは何の警戒もなく俺の隣に座った

彩雅「油断しすぎじゃないのか警戒もしないで俺の隣に座る何てよ？」

イリヤ「彩雅はそんなことしないと思ったから」

彩雅「そんな信用出来る人間じゃないよ俺は」

イリヤ「そんなことないと思うよ」

ランサー「おーい買ってきたぜ」

イリヤと話をしているとランサーが緑茶片手に戻って来た

彩雅「ご苦労パシり」

ランサー「誰がパシりだ誰が！」

彩雅「いやお前」

ランサー「何だと！」

イリヤ「フフフ」

ランサー「ちっ！で何でバーサーカーのマスターがお前の隣に座ってんだ」

彩雅「俺に会いに来たんだとよ」

ランサー「ほうモテる男は辛いねぇ」

彩雅「何か言ったか？」

ランサー「いや何でもねぇ」

イリヤ「じゃあ逆にどうしてランサーは彩雅と一緒にいるの？」

彩雅「今俺がランサーのマスターだから」

ランサー「そういうことだ」

イリヤ「どうやってランサーのマスターになったの？」

彩雅「それは秘密」

イリヤ「教えてくれてもいいんじゃないの？」

彩雅「秘密は秘密だ」

イリヤ「つまんない」

少しイリヤは拗ねてしまったようだ

だがだからと言ってキャスターの宝具を使ったなどとは言えない

彩雅「ランサーちょっと二人で話がしたいから先に帰ってくれないか？」

ランサー「断ると言っても無駄だろ？分かったよ」

ランサーはそう言い俺に緑茶を渡すと霊体化して帰って行った

イリヤ「ようやく色々聞けるようになった」

彩雅「何をだ？」

イリヤ「ねぇ彩雅って一体何者なの？」

彩雅「人間離れした人間だよ」

イリヤ「彩雅は人間離れしすぎてる」

彩雅「まぁ確かにな」

やはりはぐらかすことは無理か

イリヤ「私彩雅のこと色々調べてみたの。あの強さと魔力を持っているんなら有名な魔術師か何かだと思って」

彩雅「ほう」

イリヤ「でも調べたけど何も分からなかったの。夜月彩雅はただの学生と言うことしか」

彩雅「まぁそうだろうな」

イリヤ「一体彩雅は何者なの？」

彩雅「すまないがそれはまだ言うことは出来ない」

イリヤ「どうして？」

彩雅「まだ話す時ではないからだ」

イリヤ「じゃあその内教えてくれるの？」

彩雅「あぁイリヤが味方になってくれたらな」

イリヤ「それは無理だよ。私はバーサーカーのマスター何だから」

彩雅「そうか。後ついでに言っておくが復讐何か止めろ」

イリヤ「！何のこと？」

彩雅「とぼけるのはよせ、お前が衛宮に放っていた殺気は復讐心と思ったからだ」

イリヤ「私にはお兄ちゃんに復讐する理由がないよ」

彩雅「衛宮切嗣」

イリヤ「！」

彩雅「お前は衛宮切嗣に母親と共に捨てられ奴を恨んだ。そして今回の聖杯戦争に勝利する為と切嗣に復讐する為に参加したんだろ？」

イリヤ「どうしてそんなことが分かるの？」

彩雅「それはまだ言えない。でどう何だ？」

イリヤ「そうだよ。でもね切嗣はもう死んでいたからそれは出来な

くなっちゃったの」

彩雅「だからその息子の衛宮士郎を復讐の対象にしたんだろ？」

イリヤ「その通りだよ」

彩雅「イリヤもう一回言うが復讐何か止めろ。そんなことしたって最後は虚しくなるだけだ」

イリヤ「彩雅は復讐しようと思ったことはないの？」

彩雅「何回もあったな。一時期俺は復讐鬼と言われていたこともあったからな」

イリヤ「・・・・どうして？」

彩雅「色んな奴から恨まれ続けそいつ等に色々なものを奪われた。そして俺は奪った奴等に復讐し続けたんだ。だがな結局最後に残るのは虚しくなる気持ちだけなんだ」

イリヤ「・・・・」

彩雅「こんな俺が言えることじゃないがイリヤ復讐何か止めろ。そんなことをしたって何も戻ってはこない」

イリヤ「でも私は・・・・」

彩雅「それにイリヤは本当は切嗣に会いたかったんじゃないのか？」

イリヤ「どうして私が切嗣に・・・・」

彩雅「文句の一つでも言いたかったんだろ？」

イリヤ「・・・・」

彩雅「聞きたかったんだろ？」

イリヤ「・・・・」

彩雅「会って確かめたかったんだろ本当のことを？」

イリヤ「私は・・・・」

イリヤが今にも泣きそうになっていたので俺はイリヤを優しく抱きしめた

イリヤ「！彩雅？」

彩雅「もういいんだよ泣いても、イリヤはたくさん我慢したんだからさ」

俺がそう言った後イリヤは泣いていた。ずっと我慢していた分まで心の底から泣いてたようだった

イリヤ「ありがとう彩雅」

暫くした後イリヤは泣き止み俺達はベンチに座っている

彩雅「礼を言われるほどのことじゃないよ」

イリヤ「そんなことないよありがとう」

イリヤが笑顔で言ってきた

イリヤ「ねぇ聞いてもいい？」

彩雅「何？」

イリヤ「彩雅は泣かないの？」

彩雅「どうしてそんなこと聞くんだ？」

イリヤ「彩雅は何かそういう感じがするから」

別に隠すことでもないから言ってもいいか

彩雅「俺は泣かないんじゃなくて泣けないんだ」

イリヤ「それってどういうこと？」

彩雅「何故かは知らないが俺は昔から何があっても泣けなかったんだよ」

イリヤ「今も泣けないの？」

彩雅「あぁ。それに人を殺める仕事をする時にそういう邪魔な感情を自分自身で封印したんだよ」

イリヤ「人を殺める仕事？」

彩雅「そのことは悪いがまだ言えない」

イリヤ「分かった。でも辛くない？」

彩雅「感情の大部分が封印されているからそういうことも思えないんだよ俺は」

イリヤ「ごめんなさい。そんなこと思い出させちゃって」

彩雅「知らなかったんだから構わないよ」

イリヤ「じゃあ私そろそろ帰るね」

イリヤはそう言い立ち上がった

彩雅「イリヤ念のためこれを渡しておく」

俺は小刀と術式を施したクナイをイリヤに渡した

イリヤ「何に使えばいいの？」

彩雅「小刀のほうはヤバくなった時に上に投げろ。クナイのほうはこの前挙げた鞘と同様に常に持っていてくれ」

イリヤ「分かったありがとう彩雅。私ね森の奥のお城に住んでるから今度彩雅を招待するね♪」

彩雅「戦闘以外なら謹んで招待されるよ」

イリヤ「うん分かった。それじゃあ今日はありがとう彩雅さようなら」

彩雅「あぁ気をつけてな」

イリヤは俺に軽く手を振った後帰って行った

彩雅「俺はいつになったら悲しみを知るんだろうな」

俺はそう呟いた後自宅に戻る為に歩き出した

そして帰る途中

凛「・・・・」

アーチャー「・・・・」

凛とそのサーヴァントの贋作者が無言で立っていた

イリヤとの会話（後書き）

次回は贋作者（フェイカー）との戦闘です。

では次回も楽しんで読んでください

贋作者ＶＳ介入者（前書き）

ＶＳアーチャー戦です。

戦闘は短めです。

贋作者VS介入者

自宅に帰る途中凛とそのサーヴァントの贋作者が立っていた

彩雅「こんな所で何をしているんだ二人共？」

凛「彩雅君を待っていたのよ」

彩雅「俺を？何故だ？」

凛「色々彩雅君について聞きたいことがあるから」

彩雅「話をしたいと？」

凛「まぁそういうことよ」

凛はそう言っているが横に立っている贋作者はさっきから俺を睨んでいる

彩雅「まだ凛の質問に話せないと言ったら？」

凛「その時は・・・・」

アーチャー「・・・・・」

アーチャーは黙って俺に弓を構えた

凛「悪いけど力尽くで教えてもらうわよ」

彩雅「君はこんな脅しをするような奴ではないだろう。何か理由があるのか？」

凛「無いわよ。あえて言うならアーチャーの勘かしら」

彩雅「勘？」

アーチャー「貴様は怪しいところが多すぎるからな」

彩雅「そんなことはないだろ」

アーチャー「十分あると思うがね。サーヴァントとに対する知識、サーヴァントと互角に戦える力量などな」

彩雅「俺と戦っても何のメリットもないと思うが？」

アーチャー「貴様を捕まえれば多少は貴様の情報をはかせられると思ったのでな」

凛「そういうこと。でどうするの彩雅君？」

彩雅「まだ話すことは出来ない。君達が俺を捕らえるつもりなら俺はそれに抵抗する」

凛「そうじゃあ覚悟はいい？」

彩雅「後で後悔しても知らないからな」

アーチャー「それはこちらの台詞だ！」

アーチャーはそう言い弓を構え何本もの矢を放ってきたが

彩雅「神羅天征！」

俺は神羅天征を使い矢を全て吹き飛ばした

アーチャー「何！」

アーチャーは矢が全て何もしていないのに防がれ驚いているようだ

彩雅「遠距離攻撃では俺は倒せんよ」

アーチャー「近距離戦にもちこもうとしてるようだがそうはいかん！」

彩雅「ならお前のほうから来てもらおう。万象天引！」

アーチャー「な何！」

キィン

万象天引でこちらに吸い寄せ蹴りを見舞ったがアーチャーは干将・莫耶を投影し防いだようだ

アーチャー「貴様一体今何をした！」

アーチャーは距離をとり俺に聞いてきた

彩雅「ちょっと引力を使ってこっちに来てもらっただけだ」

アーチャー「引力だと？」

彩雅「さてここからは普通に戦うか」

俺はそう言い６つの日本刀を作り出した

アーチャー「何故６つも刀を出す？」

彩雅「お前が二刀流なら俺は六爪流だ」

俺は片手の指の間に刀を三本ずつ挟みアーチャーに向ける

アーチャー「ふっ面白い持ち方じゃないか」

彩雅「だが威力は高いぞ」

キィィィン

それぞれの刀がぶつかった

彩雅「そらそら」

アーチャー「く！」

攻める俺に対してアーチャーは守りで固めている

彩雅「どうした攻めてこないのか？」

アーチャー「貴様こそこれで攻めているつもりかね？」

彩雅「ふっ言ってくれるな」

だが実際アーチャーの言っている通り俺が集中攻撃をしているが完全には攻めきれていない

彩雅「やはり慣れていない六爪では無理か」

俺は距離をとり刀を捨て

彩雅「お前の刀を使わせてもらう」

干将・莫耶を作り出し構える

アーチャー「ふっ同じ双剣どうし果たしてどちらが勝つ」

彩雅「行くぞ！」

ガキィィィィン

互いの干将・莫耶がぶつかり火花が散る

アーチャー「ふっやるな」

彩雅「まだ序の口だが」

アーチャー「ふっその勢いが何処まで続くかな」

彩雅「無論死ぬまで！」

キィィィィン

彩雅「このー！」

アーチャー「ハァー！」

幾度も干将・莫耶がぶつかり火花が散る

一体何回打ち合っただろうか？どれくらいの時間が経っただろう？

たが俺の頭の中には目の前の贋作者を倒すことしかなかった

彩雅「自分の存在を否定するような奴などに敗けはしない！」

アーチャー「ほざくな小僧！」

彩雅「ハァー！」

キィィィン　ザクッ

アーチャーの干将・莫耶が俺の干将・莫耶を弾かれ地面に刺さった

彩雅「速く獲物を出せよ」

俺が動きを止めアーチャーに言うと

アーチャー「ふっ壊れた幻想（ブロークン・ファンタズム）」

ドカァァァン

アーチャーが壊れた幻想（ブロークン・ファンタズム）を唱え自身の干将・莫耶を爆発させた

彩雅「こんな目眩ましなど無意味」

アーチャーの気配を察知し向かおうとした瞬間

シュッ

彩雅「ちっ！」

キィン

煙の中から一本の矢が飛来し

シュッ　シュッ　シュッ　シュッ

何本物の矢が俺目掛けて跳んできた

彩雅「神羅天征！」

矢を全て神羅天征で防いだ瞬間

アーチャー「偽・螺旋剣（カラドボルグ）！」

凄まじいスピードで螺旋の剣が俺目掛けて跳んできた

彩雅「闇魔刀！」

ブリンガーを解放し闇魔刀を握り

彩雅「ハァー！」

ズバンッ

闇魔刀に魔力を込む偽・螺旋剣（カラドボルグ）を一刀両断した

だがアーチャーはこちらを笑って見ている

彩雅「しまった！」

アーチャー「壊れた幻想（ブロークン・ファンタズム）」

ドカァァァン

真っ二つにした偽・螺旋剣（カラドボルグ）が俺のすぐ近くで大爆発をおこした

アーチャー「ふっ貴様の敗けのようだな」

アーチャーがそう言い近寄ってきた瞬間

彩雅「黒虚閃（セロ・オスキュラス）」

アーチャー「何！」

真っ黒の細い虚閃がアーチャーの右肩を貫いた

彩雅「油断して個々までダメージを受けるとわな」

現在俺の恰好はずたボロだ。口と身体中から少しだが血が出ている

咄嗟に鉄塊を使いダメージを減らしたがかなりのダメージをくらってしまった

アーチャー「貴様」

彩雅「止めとけこれ以上暴れると後ろの奴等が黙ってないからよ」

アーチャー「何？」

彩雅「ランサー達いるんだろ？」

ランサー「ばれてたか」

ゼロランサー「全くあの爆発の時は心配しましたよ」

アサシン「少しは私達のマスターという自覚がほしいですな」

そう言いランサー達が出て来た

凛「な！一体何体サーヴァントと契約してるのよ？」

凛が驚きながら聞いてきた

彩雅「三人だが？」

凛「三人てもう空いた口がふさがらないわよ」

凛はため息を溢しながら言っていた

凛「全く彩雅君は何処まで聖杯戦争に首を突っ込むつもりかしら？」

凛が呆れながら聞いてきた

彩雅「終わるまでに決まってるだろ」

凛「じゃあ今後も私達の敵ね」

彩雅「まぁそうなるな」

凛「今日は見逃してあげるけど今度は容赦しないから」

彩雅「出来るならもっと人目につかない広い場所で戦闘を希望する」

凛「どうしてかしら？」

彩雅「俺の持っている力を全て使えるからだ」

アーチャー「持っている力だと？」

凛「まだ力を隠していると言いたいのかしら？」

彩雅「あぁさてじゃあ俺は帰らせてもらう。破動の三十一・赤火砲（しゃっかほう）」

俺は地面に赤火砲を放ちランサー達とその場を後にした

ランサー「お前がアーチャー何かに深手を負わされるとわな」

彩雅「油断しただけだ。次は確実に始末するつもりだ」

ゼロランサー「何も彩雅様自身が戦わなくても」

彩雅「アイツは俺の手で止めたいんだよ」

アサシン「何故ですか？」

彩雅「アイツに答えを与える為だな」

ランサー「答え？」

彩雅「まぁそう言うことだ」

はぐらかして終わらせた

ランサー「だが今日の彩雅の恰好見たらまた嬢ちゃんが怒るな」

彩雅「やば忘れてた！」

アサシン「まぁ頑張ってください彩雅様」

ゼロランサー「御武運を」

ランサー「死んだら葬式ぐらいやってやるから安心しろ」

彩雅「ちょっと待て！何で死ぬ前提で話が進んでいる！」

などと会話しながら自宅に着くと其所には黒いオーラを出した鬼が笑顔で立っていた

桜「彩雅さんおかえりなさい。とりあえず私の部屋でお話しましょう」

そう言われた後桜に腕を引っ張られ部屋に強制連行させられた

あれ桜って個々まで怖かったけ？俺一体どうなるんだ？

後ろを見るとランサー達が合掌していた

彩雅「おい合掌してないで誰か助けてくれよ！」

しかし誰も返事はせず俺は桜の部屋でみっちり説教された

そして何時間か経過して

彩雅「なぁ桜許してくれよ」

桜「許しません」

桜は何時まで経っても許してくれない

彩雅「明日デートしてやるから頼む」

何となく言ってしまったがこれはさすがにまた怒らせてしまうなと思ったが

桜「ほ本当ですか？」

彩雅「え？」

桜「あ明日そのデートしてくれるっていうのです／／／」

何か桜顔が凄く赤いがどうかしたのかな？

彩雅「桜がいいんなら俺は構わないけど」

桜「じゃじゃあ明日デートしてくれるなら許します／／／」

彩雅「あぁ分かったありがとう。じゃあ明日二人で出掛けるか」

桜「はっはい／／／」

彩雅「じゃあ俺は眠るから」

桜「はっはいそのおやすみなさい彩雅さん／／／」

彩雅「あぁおやすみ」

何か桜顔が真っ赤でかなり焦っている感じがしたが大丈夫だろうか？

そんなことを気にしながら俺は自身の部屋に戻った

厭作者ＶＳ介入者（後書き）

次回は桜とのデートです。

では次回も楽しんで読んでください。

二人でデート（前編）（前書き）

桜とのデート編です

では楽しんで読んでください

二人でデート（前編）

彩雅「何処に行くんだ？」

現在家で何処に行くのか検討中

桜「ええっとそれじゃあ遊園地に行きたいんですが／／／」

デートの定番の遊園地かまぁいいな

彩雅「あぁ別に構わないが桜大丈夫か？顔が真っ赤だぞ？」

桜「だ大丈夫です！」

彩雅「ちょっとごめんな」

コツン

桜「え！／／／」

おでこを合わせたが一応熱はないようだな

彩雅「熱はないみたいだな。気分悪くなったら言ってくれよ」

桜「はっはい／／／」

何かさっきより顔が赤いが本当に大丈夫なのだろうか？

彩雅「じゃあ行くぞ桜」

桜「はっはい！」

とりあえず冬木町にある遊園地に俺と桜は向かった

サーヴァント側

ランサー「よし後をつけるぜ」

ライダー「分かりました」

ゼロランサー「いいのだろうか後をつけるなどして？」

アサシン「普通にダメだと思われるが」

現在サーヴァント達は彩雅と桜の後を私服の状態で追跡している

ランサー「何だゼロランサーにアサシンは全然乗り気じゃねぇな」

ゼロランサー「見つかった時を考えると」

アサシン「乗り気ではなくなる」

ランサー「そっそれは確かにな」

ランサー「けどよあの彩雅がデートだぜ。こんな面白れぇもんは滅多に見れねぇからな」

ライダー「私はそんなことより桜が心配で」

ゼロランサー「確かに、彩雅様は桜様の気持ちに全く気づいていないようだからな」

アサシン「それがマスターの唯一の欠点だからな」

ランサー「だから俺達が見守るんじゃねぇか」

ゼロランサー「そう言いながら、貴様はただ面白そうだからという理由で二人を見たいのだろ？」

ランサー「さて何のことやら」

ライダー「それよりランサー貴方のその恰好は目立ち過ぎます」

ランサーの現在の服装はおなじみのアロハシャツに短パンである

ランサー「この恰好の何処が目立つんだ普通じゃねぇか？」

ライダー「どう考えても目立ちます！」

ゼロランサー「ライダー言っても無駄だ。奴は通常時の服装ですら

普通だと言うんだからな」

ライダー「そうでしたね」

アサシン「全く困ったものだ」

現在のサーヴァントの服装はランサーはアロハシャツに短パン、ライダーは黒の長袖にジーパンと眼鏡をかけ、ゼロランサーは黒の半袖に黒のジャンパーを上に着て下はジーパン、アサシンは上下紺のジャージを着ている

やはりこの中で一番に目立つのはアロハシャツのランサーである

ランサー「んなことより見失わないようにちゃんと後をつけるぞ」

ライダー「分かっています」

サーヴァント達は彩雅達の後を気付かれないようについて行く

彩雅側

俺と桜は冬木町にある遊園地に今到着した

彩雅「何か乗りたい物とかあるか？」

桜「ええっとじゃああれに」

桜が指差したのはまさかのジェットコースター

あれ桜ってこんなのに乗るような奴だっけ？

彩雅「高いとことか大丈夫なのか？」

桜「だっ大丈夫です」

本当に大丈夫なのだろうか？

心配しながらジェットコースターの列に並んだ

サーヴァント側

ランサー「どうやら嬢ちゃんと彩雅はあのジェットコースターに乗るみたいだな」

アサシン「桜様はあぁいう物に乗らないタイプだと思っていたが以外だな」

ライダー「大丈夫でしょうか桜は？」

ランサー「大丈夫何じゃねぇか」

ゼロランサー「何故そう思う？」

ランサー「そりゃ秘密だ」

アサシン「理由がないだけなのではないか？」

ランサー「そんなことはねぇ」

ゼロランサー「では理由を聞かせてくれ」

ランサー「ちっ俺の勘だよ」

アサシン「心配だな」

ゼロランサー「あぁ非常に心配だ」

ライダー「そうですね」

ランサー「そこまで否定しなくてもいいだろうが！」

などと話しながら彩雅達の後ろに並ぶサーヴァント達

彩雅側

順番が来たから座ったのだが

彩雅「桜一番前だが本当に大丈夫か？」

桜「だっ大丈夫ですよ」

そうは言っているがさっきから身体が震えている

心配をよそにジェットコースターは発進した

すぐに入り口に帰還したが感想はまぁそこそこだったな

終わった後桜がふらついていたので近くのベンチに座った

彩雅「大丈夫か？」

桜「はいすいません。思っていたより怖くて」

彩雅「あんまり無理するなよ」

桜「はい」

彩雅「じゃあ次は何に乗る？」

桜「それじゃあ次はメリーゴーランドに乗りたいです」

彩雅「分かった」

俺はそう言い桜の手を握って歩き出した

サーヴァント側

ランサー「けっこう面白かったな」

ライダー「そうでしょうか？」

アサシン「思っていたより速かったな」

ゼロランサー「確かにそうだな」

サーヴァント達もジェットコースターに乗ったようだが、彼等も感想はそこそこ楽しめたようだ

ランサー「おっ！彩雅が嬢ちゃんの手を握ったぜ」

ランサーが彩雅達を見ながら言った

ライダー「ようやくですか」

ゼロランサー「このまま良い展開になればいいのだが」

アサシン「相手が彩雅様ではそれが分からんな」

ランサー「全く世話がやけるな」

尚も心配しながら後をつけるサーヴァント達

彩雅側

あの後メリーゴーランドに乗りその後ゴーカートに乗った

思ったよりけっこう楽しい最初は面倒だなと思っていたのだが

桜「そっそろそろお昼ご飯にしませんか？」

彩雅「あぁそうだな」

ちょうど腹が減ってきたところだった

桜「一応作ってきましたから」

そう言うと桜は持っていたカゴから弁当を出した

彩雅「いつもすまないな」

桜「いっいえ」

桜は少し慌てながら弁当を並べていく

弁当はサンドイッチと色とりどりのおかず

いつも飯も作ってもらってるから何か悪い気がする

彩雅「いただきます」

桜「いただきます」

ハムの挟んだサンドイッチを食べてみたが普通に美味いな

桜「えっとどうでしょうか？」

桜が心配そうな顔で聞いてきた

彩雅「普通に美味いよ」

桜「よかったです」

桜何か嬉しそうな顔になったな

その後おかずなども食べたがやはりどれも美味かった

サーヴァント側

ライダー「二人共良い雰囲気になってきましたね」

ゼロランサー「あぁそのようだな」

アサシン「一安心だ」

ランサー「おーい買って来たぜ」

ランサーが四人分の焼きそばとたこ焼きを買って戻ってきた

アサシン「何故全員同じ物何だ？」

ランサー「お前等の好み何か知らねぇから俺が食いたかったもんを買っておいたんだよ」

ゼロランサー「気がきかない奴だな」

ランサー「文句言うなら食うな！」

アサシン「まぁ折角買ってきてくれたんだ食べよう」

ライダー「そうですね折角買ってきてくれたんですし」

ゼロランサー「そうだな」

ランサー「てめぇ等、何しょうがないがないが食ってやろうみたいなこと平然と言ってんだよ！」

サーヴァント達も少し騒がしいがご飯を食べ始めた

ライダー「思っていたよりは味はいいですね」

アサシン「あぁ確かにな」

ゼロランサー「だが桜様のご飯と比べると」

ランサー「かなり味に差があるな」

何気に遊園地の飯の味を桜の飯と比べながら食事をするサーヴァント達だった

彩雅側

飯を食い終わり現在はぶらぶら何処に行くのか検討中

彩雅「なぁ桜お化け屋敷に入りたいんだがいいか？」

何となく此所のお化け屋敷が怖いのか調べる為に行くことにした

桜「えっ！あんまり入りたくないんですが分かりました」

了承してくれたがやはり行きたくはないようだな

彩雅「ありがと。じゃあ行くか」

桜「はい」

俺達二人はお化け屋敷に向かった

この後一騒動あることは無論二人は知らない

後編へ続く

二人でデート（前編）（後書き）

後編は一騒動あります

彩雅の気持ちも判明します

ではまた次回も楽しんで読んでください

二人でデート（後編）（前書き）

更新送れてすいません

今回あるキャラが出ます

ではどうぞ

二人でデート（後編）

お化け屋敷に入ろうとした俺と桜だが

彩雅「桜本当に大丈夫か？」

桜「だっ大丈夫です」

桜の身体は入り口の前でかなり震えていた

そんなに怖いとは思えないがな

従業員「次の方どうぞ」

俺達の順番がきたようだ

桜「いっ行きましょう彩雅さん」

桜がそう言い俺と腕を組んだ

彩雅「あぁあんまり大きな声出すなよ」

桜「わっ分かってますよ」

桜は少し不機嫌そうに俺の注意に返事をしその後俺達は中に入った

サーヴァント側

ランサー「今度はお化け屋敷とか言うのに入るみたいだな」

ライダー「流石にあの中に入っては見つかるのでは？」

アサシン「確かにその可能性が極めて高いな」

ゼロランサー「霊体化すれば問題ないだろう」

ライダー「あぁその手がありましたね」

ランサー「それなら恐らくばれないな」

アサシン「彩雅様の間合いに入らなければな」

ランサー「暗いから間合いに入らないよう注意して進まねぇとな」

彩雅の間合いに入らないよう注意しながら霊体化し後に続いた

彩雅側

お化け「ばぁー！」

桜「きゃー！」

彩雅「・・・・」

お化け屋敷の通路を進んでいるといきなりお化けが出てきた

だがやはり所詮は人怖くないな

桜はかなりびびって俺の腕を強く掴みながら震えているようだが

彩雅「桜怖がり過ぎ」

桜「だだって彩雅さんは怖くないんですか？」

彩雅「変化！」

俺は変化を使い有名な井戸から出る幽霊になり前を見ている桜に声をかけた

彩雅「桜」

前を見ている桜を呼び

桜「な何ですか彩雅さ・・・」

桜はこっちを見た瞬間固まり

桜「きゃー！離して！」

桜が悲鳴をあげ俺を突き飛ばした

桜「た助けてください」

桜は腰がぬけたのかその場に座り込み涙目になりながら俺に言ってきた

まさか本物だとか思っているのか？

彩雅「ハハハ俺だよ桜」

桜「え！」

これ以上嚇かすと可愛いそうなので変化を解きいつもの姿に笑いながら戻った

彩雅「どうだ怖かったか？」

桜「彩雅さんの・・・・」

桜は震えながら下を見ているそんなに怖かったのか？

彩雅「えっと桜」

流石に悪いと思い謝ろうとした瞬間

桜「彩雅さんの馬鹿！」

ペシッ

彩雅「痛！」

桜が涙目で怒りながら俺にビンタをしてきた

桜「馬鹿！馬鹿！彩雅さんの馬鹿！」

やばい桜を完全に怒らせてしまったようだ

サーヴァント側

ランサー「ハハハ彩雅の奴嬢ちゃんを怒らせちまったみたいだな」

少し離れた所でランサーが笑って見ていた

ライダー「ランサー！声が大きいです！」

ランサー「おっといけねぇ」

ゼロランサー「一体彩雅様は桜様に何をやったんだ？」

アサシン「姿を変えて驚かしたようだ」

ライダー「それであんなに桜は怒っているんですね」

ランサー「ハハハこりゃ笑いが止まらねぇぜハハハ」

ランサーはよほど彩雅が桜を怒らせたのが面白いのかさっきから笑っている

ゼロランサー「ランサーあまり笑い声を出すな気付かれる」

ランサー「ハハハすまねぇ」

ランサーは尚も笑って彩雅達を見る

彩雅側

彩雅「えっとごめん桜謝るから許してくれ」

桜「許しません」

桜は俺から少し距離をとり前に進み出した

彩雅「桜俺から離れて迷子になっても知らねぇぞ」

桜「ふん」

桜はご機嫌斜めのまま前に進んでいたら

？「ばぁ！」

桜「きゃー！」

桜がいきよいよく俺の元に来て腕を掴んだ

彩雅「今度は何に脅かされたんだよ？」

桜「えっとあれ？よく考えると今の金髪の女の人だったような？」

彩雅「金髪の女？」

とりあえず曲がり角に向かうと

？「ばぁ！」

彩雅「くだらん客かよ」

脅かしてきたのはまともな服装の女だったので客のようだ

？「あれ？何で驚かないの？」

彩雅「別にこういうことには慣れてるからさ」

？「つまんないな」

女はつまらなそうな顔をして俺を見る

彩雅（？どっかで見たことがある女だな）

何故か分からないが俺は目の前の女を知っている気がする

？「おい何やってるんだ？」

女の少し前に何故か学生服を着て眼鏡をした青年がこっちに来た

彩雅（？こいつもどっかで見たことが）

俺は青年を見ながら考える

青年「全く後ろでばぁ！って声が二回聞こえたと思ったらお前の仕業だったのか？」

青年が女を見て言う

？「だって作り物や変装したのばっかでつまんなかったんだもん」

女は頬を膨らませながら青年に言う

青年「全くすいませんこいつが馬鹿なことしたみたいで」

青年が女頭を持ちながら一緒に頭を下げた

桜「いえちょっと驚いただけですから」

彩雅「気にするな」

俺と桜は少し笑いながら青年達にそう言った

青年「本当すいませんでした。じゃあ行くぞアルクェイド」

青年は女の名を呼び歩き出した

？アルクェイド？何か何処かで聞いた気が

アルク「あっ！待ってよ志貴！」

アルクェイドと言われた女は青年の後を追って行った

彩雅「志貴にアルクェイドどっかで聞いた気が」

桜「彩雅さんあの二人を知ってるんですか？」

彩雅「あぁちょっと名前に聞き覚えがな」

俺はあの二人が誰だったか考えながら再び桜と歩き出した

サーヴァント側

ライダー「ランサーあの青年の隣の女をどう思います？」

さっきの青年と女を見ていたライダーが聞く

ランサー「恐らくライダーお前と同じ考えだな。アサシンとゼロラ

ンサーはどう思う？」

ゼロランサー「私も恐らく同じ考えだ」

アサシン「私も同じく」

サーヴァント達は青年の隣の女を思い出しながら

全員「アイツは人間じゃない」

自然とそう呟いていた

彩雅側

無事にお化け屋敷を出ることに成功した

無論途中何回も桜が悲鳴をあげたのは言うまでもない

現在は観覧車に二人で乗っている

彩雅「けっこう高いな」

桜「そうですね」

さっきからずっと会話が続かない

恐らくこういう完璧に二人だけの空間は初めてだからだろう

桜「彩雅さんは・・・・」

何を話そうか考えていたら桜が口を開いた

彩雅「俺が何だ？」

桜「私のことどう思ってます？」

桜が真剣な顔で聞いてきた

彩雅「逆に聞くが桜は俺のことをどう思っている？」

感情の大半が封印されている今の俺では答えは恐らく出ないので、
逆に聞くことにした

桜「私はえっとその」

桜の顔がどんどん赤くなっていくがどうかしたのかな？

桜「えっと好きです・・・・」

？今桜からあり得ない言葉が聞こえた気がするな

彩雅「悪いがもう一回言ってくれないか？」

俺は真っ赤な顔をしている桜に言った

桜「えっと彩雅さんのことが好きです！」

マジか？確か桜は衛宮のことが好きな筈じゃなかったか？

彩雅「何故俺が好き何だ？はっきり言うが俺は桜が好きになるような男じゃないぞ」

桜「そんなことありません！」

彩雅「俺はお前に何もしてやっていない」

桜「彩雅さんは私をそれにライダーを救ってくれたじゃないですか！」

彩雅「それが理由か？」

桜「え？」

彩雅「救ってくれたから好きになったのか？なら救わなければお前は俺を好きにならなかったということか？」

桜「それは・・・・」

彩雅「俺はお前の気持ちにこたえることは出来ない」

桜「・・・・」

桜は無言で俺を見るだがこたえられないのは事実だ。でも

彩雅「でもお前がこんな俺でもいいなら、お前の気持ちをこたえれるようになるまで待ってくれないか？」

自然とこんなことを言ってしまった

桜「待ってます。私待ってますから」

俺の返事に桜はこたえてくれた

なら俺もこたえるように頑張ってみよう

彩雅「すまないな桜」

桜「謝らないでください彩雅さん」

彩雅「ふっぁぁ」

その後俺達は無言だったが俺の心は妙に満足感に満ちていた

これも桜のおかげなのだろうか？

サーヴァント側

ランサー「彩雅の野郎大丈夫なのか？」

ライダー「心配です」

アサシン「二人共出て来たぞ」

彩雅達が観覧車から出てきた

ゼロ「どうやら大丈夫のようだな」

二人共笑っているので恐れていたことはおきなかったようだ

ランサー「そろそろ日がくれるから帰るか？」

アサシン「そうだな」

ゼロ「もう心配はいらないだろうからな」

ライダー「そうですね　キャッ！」

？「おっとこれはすいません」

ライダーが帽子をかぶった緑髪の男とぶつかり倒れた

？「大丈夫ですか？怪我はありませんか？」

ライダー「大丈夫です」

？「すいません貴方のような美しい方に怪我をさせそうになって」

ライダー「大丈夫ですから気にしないでください」

？「本当に申し訳ありません！」

男は頭を下げ歩いて行った

アサシン「大丈夫かライダー？」

ライダー「大丈夫です」

ランサー「じゃあ俺達はそろそろ戻るか」

ゼロ「そうだなもう心配もいらないだろう」

ライダー「本当によかった」

サーヴァント達は霊体化し帰った

？「サーヴァント全く厄介な相手みたいですね」

先ほどぶつかった男もそう呟き何処かへ消えた

彩雅側

彩雅「そろそろ帰るか」

桜「はい」

今日けっこう楽しかったかな？

そんなことを思いながら俺と桜は家に帰った

二人でデート（後編）（後書き）

次回は衛宮と鍛錬です

また次回も楽しんで読んでください

衛宮との鍛錬１（前書き）

恐らく今年最後の投稿です。

来年も頑張って投稿していくつもりです。

衛宮との鍛錬1

衛宮「頼む、俺を鍛えてくれ！」

彩雅「断る」

朝、衛宮が俺の家に訪ねてきた。用件は鍛えてほしいからというもの

衛宮「頼む」

彩雅「セイバーときざな弓兵がいるだろ」

衛宮「いや、セイバーにはすでに稽古をつけてもらっている」

彩雅「ならいいだろ、わざわざ俺に頼まなくても」

衛宮「セイバーより強い彩雅だから頼んでるんだよ」

彩雅「何故俺にこだわる？其所に寝転がっている槍兵にでも頼めばいいだろ」

ランサー「悪いが俺はパスだ」

彩雅「お前さ、家に来て態度でかくなってないか？」

ランサー「そんなことはねぇさ」

くそゼロランサーとアサシンは偵察に行ってるしついてねぇな

彩雅「ちっ！で何で俺にこだわる？」

衛宮「お前は強い、それに剣術が出来るみたいだからだ」

彩雅「俺に、剣術を教えてくれと言いたいのか？」

衛宮「あぁ頼む！」

彩雅「俺の剣術は特殊だからお前には習得出来ない」

衛宮「そんなこと、分からないじゃないか！」

彩雅「無理だな」

飛天御剣流などの剣術は管理者が力をくれたから出来るもの

素人がやって出来るものとは思えない

彩雅「何故そこまで強くなりたい？」

衛宮「セイバーや遠坂達が戦っているのに、俺だけ何も出来ないから」

彩雅「だから力がほしいと？」

衛宮「あぁ」

衛宮はかなり真剣な目をしている

正直俺は人に教えるのは得意じゃない

手加減もうまく出来ないから下手したら衛宮が死ぬかもしれない

彩雅「死ぬかもしれないぞ、それでもいいのか？」

衛宮「構わない」

目は真剣そのもの。まぁ今の内に鍛えておけばそこそこの実力にはなるかもしれないな

彩雅「いいだろう。だが同時に強化も鍛えるからな」

衛宮「えっ！何で強化のことを知ってるんだ？」

彩雅「細かいことは気にするな。後基本の動きしか教えないからな」

衛宮「何で知ってるのかが気になるが、ありがとう宜しくな」

彩雅「あぁ。じゃあ早速始めるから道場に行くぞ」

衛宮「あぁ」

俺と衛宮は衛宮邸の道場に向かった

彩雅「準備はいいか？」

俺は木刀を持ち衛宮に聞く

衛宮「あぁ、いいぞ」

衛宮も木刀を持ち答える

桜「衛宮先輩　彩雅さん頑張ってください」

ライダー「二人共頑張ってください」

ランサー「面白いもんが見れそうだな」

セイバー「頑張ってくださいシロウ」

凛「まぁ、二人共頑張りなさいよ」

アーチャー「まぁ、頑張りたまえ」

何かギャラリーがいるけど気にしない。というかよく凛と贋作者は

俺の目の前に出ることが出来るな。嘗められているのか？

彩雅「まず衛宮、木刀を強化しろ」

衛宮「えっ！何で？」

彩雅「馬鹿が」

バキッ

衛宮「な！」

俺は衛宮の持っていた木刀に自身の木刀をぶつけ衛宮の木刀を折った

彩雅「今のままの木刀では話にならん。さっさと強化しろ」

衛宮「分かった」

衛宮が目をつぶり木刀を強化しているようだ

衛宮「これなら恐らく」

しかし強化した木刀もあっさり折った

彩雅「もっとしっかり強化をしろ！これじゃあ鍛える以前の問題だ」

衛宮「くそ」

それから数十分強化をさせ続け、ようやく俺の一撃に耐えられるぐらいの強化が衛宮は出来るようになった

彩雅「これでやっとまともに鍛錬が出来るな」

衛宮「あぁようやく」

彩雅「今から俺が攻撃するから、それを受け続けろいいな？」

衛宮「俺が攻撃するのはダメなのか？」

彩雅「しても構わないが、出来るならな！」

衛宮「なっ！」

一気にまわいをつめ衛宮に横凪ぎを放つ

衛宮「くっ！」

衛宮はギリギリでそれを受けるが

彩雅「まだまだだな」

木刀を退いたすぐその後連撃を放つ

衛宮「くそ！」

衛宮は連撃もギリギリ防いでいるが、少しでもスピードを上げたら恐らく防げないな

彩雅「やはりこんなもんか」

バキッ

衛宮「ぐはっ！」

少し力を込めた攻撃で強化した木刀は折れ衛宮に直撃した

彩雅「やはり話にならんな」

アーチャー「いや全く、やるだけ無駄だと思うが」

衛宮「五月蝿い！」

衛宮は腹を抑え立ち上がった

彩雅「続けたいなら早く強化をしろ」

衛宮「分かっている！強化・開始（トレース・オン）」

その後も一方的な攻撃をし続け、衛宮はかなり手加減してはいるが俺のスピードについてこれるようになった

衛宮「ハァハァまだまだ」

彩雅「もうやめとけ、身体が壊れたら面倒だからよ」

衛宮「まだ大丈夫だ！」

彩雅「二つ選択肢をやろう。一つは今すぐやめるか、二つ目は俺の攻撃で生死不明で退場するか、さぁどっちを選ぶ？」

殺気を出しながら衛宮に尋ねると

衛宮「けっこう疲れたからもうやめよう」

衛宮は震えながらそう答えた

彩雅「物分かりがよくて助かる」

衛宮「じゃあ、俺はちょっと部屋で休むな」

セイバー「シロウ私も行きます」

桜「あっ、先輩私も」

そう言い衛宮とセイバーと桜は行ってしまった

アーチャー「貴様はやはりえたいが知れんな」

衛宮がいなくなった後アーチャーが俺を睨み殺気を向けてくる

彩雅「衛宮と鍛錬してる時からずっと俺に殺気を向けているが、何が気に入らない？衛宮に強くなってもらっては困るのか？まぁお前の器量ではそう思うだろうな」

アーチャー「貴様！」

アーチャーが干将・莫耶を両手に持ち斬りかかってきたが

キィィン

だがその攻撃はランサーに弾かれた

アーチャー「ランサー貴様！」

ランサー「悪いがな、一応マスターだから守らねぇといけねぇんだよ」

ランサーがそう言い槍を構えるとライダーもその横に立った

アーチャー「ライダー、何故君も奴の前に立つ？」

ライダー「彩雅は私と桜の恩人です。彼に危害を加えるのは許せません」

アーチャー「ちっ！」

彩雅「二人共、俺のことは心配いらんから下がってくれ」

ランサー「分かったよ」

ライダー「・・・分かりました」

ライダーは渋々そうだったが二人共俺の後ろに下がった

アーチャー「自ら私の前に立つとは、貴様は何を考えている？」

彩雅「別に何も、お前が望むならこの前の続きをしてやるが？」

暫くアーチャーと睨みあっていると

凛「はい、二人共そこまでよ」

凛が間に入ってきた

凛「アーチャー、すぐに彩雅君に突っ掛かろうとしないでくれない」

アーチャー「私は別にそういうわけでは」

何か凛がアーチャーに説教をしだしたので、俺とランサーとライダーは自宅に戻った

その日の夜俺は衛宮の部屋に侵入した

あぁ別に変なことをする為じゃないからな

彩雅「衛宮起きろ」

衛宮「何だよ彩雅こんな夜中に」

衛宮は目を擦りながら起き上がった

彩雅「何、ちょっと今から鍛錬をしてやろうと思ってな」

衛宮「昼間散々痛めつけたのに、まだ痛めつける気か？」

彩雅「いや、今からやるのは魔術関連の鍛錬だ」

衛宮「魔術関連？」

彩雅「あぁ、詳しい話しは道場でするから行くぞ」

衛宮「なっ！ちょっと待」

衛宮の返事を待たず俺は衛宮を抱え剃で道場に移動した

衛宮「それで何の鍛錬をするんだ？」

彩雅「まぁ、そう慌てるな」

とりあえず道場に結界をはり入れなくした

彩雅「今からお前に投影魔術をやってもらう」

衛宮を見て言う

衛宮「投影魔術？」

彩雅「そう、投影だ」

衛宮「俺は魔術は強化と解析以外、何も出来ないんだが？」

彩雅「いや、お前は出来る筈だ恐らくな」

俺はそう言い一本の刀を作り衛宮の前に投げた

衛宮「これは？」

彩雅「頭でその刀をイメージしてみろ」

衛宮「イメージ？」

彩雅「そうだやってみろ」

衛宮はとりあえず目をつぶりイメージをしたようだが

衛宮「イメージしたけど何もおきないぞ」

彩雅「魔術回路が開いていないせいか？」

正直衛宮の投影能力は俺はよく知らない

だが今の状態では恐らく、魔術回路が完全に開いていないからだろう

彩雅「しょうがない、ちょっと早いが無理矢理魔術回路を開くか」

俺はある物をポケットから取り出した

衛宮との鍛錬１（後書き）

次回も鍛錬です。

ではまた次回も宜しくお願いします。

衛宮との鍛錬２（前書き）

今回は短いです

衛宮との鍛錬2

彩雅「衛宮、これを飲め」

俺はポケットからある物を出し衛宮に投げた

衛宮「これは？」

投げた物は液体が入っている小瓶

彩雅「魔術回路を強制的に開く薬だ」

衛宮「魔術回路を？」

彩雅「あぁ、俺が間桐の家からちょっと拝借したもんだ」

何でこんなもんがあったのかは知らんがな

衛宮「これを飲めば、俺の中の魔術回路を開けるのか？」

彩雅「あぁ、だがリスクがあるぞ」

衛宮「リスク？」

彩雅「あぁ」

衛宮「どんなリスク何だ？」

衛宮は俺を見て聞く

彩雅「それを飲めば、確かに魔術回路を開くことが出来る。だが言った通り無理矢理開くんだ。恐らく身体にかなりの激痛がはしる」

衛宮「そんな痛みぐらい、耐え抜いてみせる！」

衛宮の目には信念があるように感じられた

まぁこの程度のことで弱音を吐くような奴だとは思ってなかったが

彩雅「だが、それによって魔術回路がいかれて魔術が二度と使用不可になるかもしれないが、それでもいいのか？」

衛宮「それでも・・・・構わない」

一瞬決意に迷ったようだが、衛宮はすぐ覚悟を決めたようだ

彩雅「なら飲め、そして痛みに耐え抜け」

衛宮「俺は、絶対痛みに負けない！」

衛宮はそう言い薬を一気に飲んだ

衛宮「特に、何も変わらないようだが？」

衛宮は薬を飲んだが、痛みがこないことを不思議に思っているようだ

彩雅「痛みは、すぐくるとは限らない」

衛宮「でもこなかったらぐ！」

衛宮はその場に突如膝をつき身体を抑えた

彩雅「始まったようだな」

衛宮の身体からバチバチと音が聞こえる

衛宮「うっ、く！が！ぐは！」

衛宮は身体を抑え床を転がり痛みに耐えている

かなりの激痛が恐らく衛宮に襲い掛かっているのだろう

俺はその場に座り衛宮を見る

彩雅「痛みに耐え抜け衛宮士郎、そのすればお前はまた一つ強くなれる」

俺は衛宮士郎という男の強さを信じ、奴を見る

衛宮ｓｉｄｅ

衛宮「ぐぁー！」

俺の身体にかつて無いほどの激痛がはしる

身体が焼けているように熱い

そして焼かれている以上の激痛が俺を襲う

まさかここまでの痛みだとは想像していなかった

衛宮「う！あぁー！」

痛みは全く止まる気配はないそれどころかどんどん強くなっていく

だが今の俺には何も出来ない

ただ耐えることしか俺には出来ない

彩雅「痛みに耐え抜け衛宮」

彩雅はそう言い俺を見ている

簡単に言ってくれる。この痛みはそう簡単に耐えきれるような痛みではない

だが諦める気はない。俺はこの痛みを乗り越え強くならなくてはいけない

セイバー達を守る為にもそして正義の味方になる為にも俺は強くならないといけないんだ！

俺はひたすら痛みを我慢する。絶対に耐えきってやる！

衛宮ｓｉｄｅ　ｏｕｔ

衛宮が薬を飲み早くも2時間が経過した

だが以前衛宮は身体を抑えて倒れている

今の状態では奴が耐えられるかどうか微妙だな

俺的には耐え抜いてほしいな

今の内に、衛宮が投影を覚えてくれればキャスター戦の時までには強く出来る筈

アイツが早く力をつければ慢心王にも対抗出来るだろう

まぁ贋作者の相手は奴に渡さないがな

アイツだけは俺の手で倒す！

そう言えば、最近気がついたがこの世界の奴等は性格と好きな物が若干違う気がする

まず、確か桜はオカルト物が大好きの筈なのに、お化け屋敷で悲鳴をあげていたこと

もう一つはアーチャーがやけにきれやすいこと

奴はもっと冷静で物事を見ていた筈だ

俺と介入者の出現によって全員の性格などに変化があるのか？

まぁ俺にはどうでもいいことだが

キィィィィン

彩雅「何だ？」

何者かが結界を攻撃している

衛宮「な何だ今の音は？」

身体を抑えながら衛宮が俺に聞く

彩雅「少しは、余裕がでてきたようだな衛宮。分からん、敵の攻撃かもしれん」

今、攻撃してくるような敵はキャスターか？それとも贋作者か？この攻撃なら慢心王とキャスターは無いか

奴等なら、宝具大量発射や魔術で結界を破るはず

キィィィィン

ならこの斬撃音は誰だ？まぁ行けば分かるか

彩雅「衛宮、俺は外に行き攻撃してる奴を見てくる。お前は、此所から出るな」

衛宮「出るなって、言われなくても出れねぇよ」

彩雅「もう少しで、痛みがなくなりそうだな。じゃあ俺は行く」

衛宮「き気をつけてな」

俺はその後外に敵を確認しに向かった

衛宮との鍛錬２（後書き）

鍛錬はまだ続きます

では次回も宜しくお願いします。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n4729n/

Fate/stay nightに介入した青年

2011年1月31日22時28分発行